開催報告書

【開催概要】

日時　　令和７年２月１６日（日）１４時～１６時

会場　　都議会議事堂　都民ホール

参加者　７４名

地域コミュニティ活動推進フォーラム・プログラム

令和７年２月16日（日）

◎開会・主催者挨拶

東京都生活文化スポーツ局都民生活部長　柏原　弘幸

◎第１部：パネルディスカッション

【「町会・自治会活動に関する調査」について（調査結果の概要説明）】

東京都生活文化スポーツ局都民生活部地域活動推進課長　沼倉　護

【ファシリテーター】

・小山　弘美　氏　　関東学院大学社会学部教授

【パネリスト】

・齊藤　広子　氏　　横浜市立大学国際教養学部教授

・小野　悠　　氏　　豊橋技術科学大学　建築・都市システム学系准教授/
デジタル共創コミュニティ代表

・谷　亮治　　氏　　京都市まちづくりアドバイザー/花園大学講師

◎休憩

◎第２部：事例紹介・トークセッション

【ファシリテーター】

・小山　　弘美　　氏　関東学院大学社会学部教授

【事例紹介団体】

・馬込三本松町会　（大田区）

・高瀬住宅自治会　（町田市）

【パネリスト】

・津賀　　高幸　　氏　株式会社ダイナックス都市環境研究所

・中山　　エミリ　　氏　タレント

◎閉会挨拶

東京都生活文化スポーツ局都民生活部長　柏原　弘幸

◎閉会

主催者挨拶

東京都生活文化スポーツ局都民生活部長　柏原　弘幸

本日はお忙しい中、この地域コミュニティ活動推進フォーラムにご来場いただきまして、誠にありがとうございます。

東京都では、町会・自治会、ボランティア活動など、地域の皆さんの活動を色々な形で支援させていただいているところでございます。防犯や防災、災害時の対応、高齢者や子供たちの見守り、そして地域のつながりやにぎわいづくりなど、地域でコミュニティ活動に取り組んでいらっしゃる皆さんの活動は、私たちの街を豊かにし、生活を豊かにする大変大切な役割を果たしておられるなと実感しておるところでございます。

一方で、町会・自治会で言いますと、例えば入る方は加入者が減ってきているとか、あるいは役員の高齢化などといった問題、地域コミュニティの活動の担い手をどうしていくのかとか、活動をどのように進めていくのかといった課題が持ち上がることも珍しくないという状況でございます。

本日のこのフォーラムでは、さまざまな知見やご専門やご経験をお持ちの方にお集まりいただきまして、皆様と一緒にこれからの地域コミュニティの活動、町会・自治会の活動などについて考えてみたいと思っております。東京都でこういったイベントをするのは初めてでございます。

第一部では、地域コミュニティやマンション、町会・自治会のデジタル化、各分野の有識者の方々をお招きしてのパネルディスカッションを行います。そして第二部では、子供たちの居場所づくりや様々な団体と連携して防災イベントなどを取り組んでいらっしゃる町会・自治会さんから、その活動事例についてのご紹介、パネリストを交えてのトークセッションを行いたいと思います。

本日のイベントが、ご来場の皆様にとりまして、地域活動についてのきっかけづくりになれば幸いと存じます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

第１部：パネルディスカッション

【ファシリテーター】

・小山　弘美　氏　　関東学院大学社会学部教授

【パネリスト】

・齊藤　広子　氏　　横浜市立大学国際教養学部教授

・小野　悠　　氏　　豊橋技術科学大学　建築・都市システム学系准教授/デジタル共創コミュニティ代表

・谷　亮治　　氏　　京都市まちづくりアドバイザー/花園大学講師

【司会】

それでは、これより第一部のパネルディスカッションを始めます。初めに、昨年公表した町会・自治会活動に関する調査の結果について、東京都生活文化スポーツ局都民生活部地域活動推進課長　沼倉護よりご説明申し上げます。

【地域活動推進課長】

皆様、こんにちは。東京都で町会・自治会やボランティアなど共助の推進を担当しております、沼倉と申します。本日は多くの方にお集まりいただきましてありがとうございます。パネルディスカッションの開始に当たりまして、昨年、東京都が実施をいたしました町会・

自治会の調査に関してご説明をさせていただければと思っております。

次のスライドをお願いいたします。この調査は、町会・自治会の取り組みの現状や課題、都民の意識などを把握するために、5000 人の都民の方と 1470 の町会・自治会、62 の区市町村にご協力いただきました。

今日配布資料の中にこちらの資料の方もお配りしておりますので、目の前の画面とお手元の資料の方、どちらかをご覧いただければと思っております。

具体的な調査の内容、結果についてご説明をさせていただきます。次ページをお願いいたします。今回の調査では、都民の 25.7%の方が近隣住民と付き合っている、71.3%が付き合っていないというような結果がありました。また、地域社会での暮らしについて不安に思うことは、災害への備えと防犯対策が上位となっております。

続きまして、町会・自治会への加入につきましては、41.4%の方が加入をしている、48.0%の方が加入をしていない、10.6%がわからないというような回答をいただいております。また、年齢別に分析をいたしますと、20 代の方では 18.2%、70 代 75.3%というように、年齢が上がるにつれて加入が増えているというような傾向が見られました。

次のスライドをお願いいたします。こちらは、町会に加入をされていらっしゃる方にお聞きした項目になります。強化をしてほしい活動は防災と防犯、先ほど、都民の方が不安に思うようなことと同じような結果となりました。

また、町会・自治会へ加入してよかったということは、行政や地域の情報を効率的に得ることができた、地域の知り合いが増えたというものが上位となりました。一方で、活動の問題点については、若者や仕事を持つ人が参加しにくい、活動への負担感が大きいというものが上位となりました。加入者を増やすためには、負担にならない範囲で活動が参加できる仕組みなど、負担の軽減を求める声が多い傾向がございました。

次のスライドをお願いいたします。これ以降は、町会・自治会にお聞きした内容になります。回答いただいた町会・自治会では、約６割が 500 世帯未満との回答をいただきました。それぞれの加入率につきましては、55.1%の町会・自治会が 50%以上の加入があるというふうに回答をいただいております。エリア内の住宅の構成をお聞きしましたが、約８割が戸建て住宅を含む構成となっておりました。会長の年齢は、70 代が 48.2%、80 代が 17.7%と高齢の方がこの町会・自治会の活動を支えていることがわかりました。

次のスライドをお願いいたします。町会・自治会の中で力を入れている活動としては、防災、お祭り、盆踊りという順になっておりました。また、町会・自治会が抱える運営上の課

題は活動の担い手の不足、固定化、役員の高齢化が進んでいる、加入しない住民が増えているとの順となっておりました。その中で、解決に向けて取り組んでいることとしましては、防災に力を入れて取り組んでいる、若い世代や子育て世代に興味を持ってもらうようなイベント等の企画、地域の他の組織や団体との連携・協力を進めているとの回答をいただいております。

次のスライドをお願いいたします。都が現在課題として考えておりますマンションと町会のつながりづくり、デジタル化の推進についての内容についてお尋ねしたものになります。町会からマンションとのコミュニティ形成につきましては、参加者や担い手への期待のほか、防災訓練の共同実施による地域防災力の強化に期待が寄せられていました。戸建てと集合住宅の交流につきましては、戸建ての町会も集合住宅の自治会も一定の割合交流があるとの回答をいただいております。また、防災訓練を連携しているような町会も一定の数ありました。

次のスライドをお願いいたします。デジタル化の取り組みについても、現状を町会・自治会の方にお聞きしております。役員間の連絡では、LINE やメールなどを導入されている方がいらっしゃる一方で、ホームページの開設では約２割、LINE の会員への情報発信は約１割にとどまっておりました。その理由としましては、使いこなせる人が少ない、担える人材がいないというような回答が上位となりました。これからも都はこのような調査の結果で得られました結果を事業に生かしてまいりたいと思います。以上、雑駁ですが、ご説明となります。よろしくお願いいたします。

【司会】
ありがとうございました。それでは、パネリストによるディスカッションに入ります。パネリストの皆様をご紹介いたします。

横浜市立大学国際教養学部教授　齊藤広子様、
豊橋技術科学大学建築・都市システム学系准教授、デジタル共創コミュニティ代表　小野悠様、
京都市まちづくりアドバイザー、花園大学講師　谷亮治様、
そして、ファシリテーターを務めていただきますのは、関東学院大学社会学部教授　小山弘美様です。

それでは、ここからの進行は小山教授によろしくお願いいたします。

【小山さん】
改めまして、皆さん、こんにちは。今日はですね、いらっしゃっていただいた方々、このタイトル、地域コミュニティ活動推進フォーラムということで、自治会活動を中心にですね、コミュニティの色んなことに日々思いを巡らせて、で、ここで何かヒントを得て帰ろうと思

って、わざわざ足を運んでくださった方々だと思います。ちょっと肩の力を抜いてというかですね、皆さんと本当は一人一人ディスカッションできる場があればいいんですけれども、ちょっとこちらの先生方をお迎えして、色々とヒントをいただければなというふうに思っています。

今、先ほど東京都の調査結果報告ありましたけれども、皆さんが普段関わってらっしゃる地域の感じてらっしゃることと、そんなに大きくやっぱりデータというのが違わないのかなと思うのですね。加入率が低くなっていたり、例えば会長さんの年齢がすごく高くなっていたり、そういった中で、今日先生方をお迎えして、デジタル化っていう部分と、またやっぱりマンションが東京の場合はですね、集合住宅が多いですので、そうした集合住宅との連携というか、そういうところを中心に色々と考えていきたいと思っております。

というところで、先生方からまずはですね、先ほどの東京都の調査を踏まえまして、ご自身の色々なご研究だったり、関わっていらっしゃる地域の事例を踏まえながらコメントをいただきたいと思っております。まずは京都で色々とまちづくりのことをやっていらっしゃる谷先生の方からコメントいただけますでしょうか。

【谷さん】

はい。みなさんこんにちは。京都から参りました谷と申します。初めて都庁という場所に来ました。ちょっとドキドキしております。

まず、東京都の行われた調査を拝見しましての感想から始めたいと思います。大変興味深く拝見しました。都市部というのは軒並みどの自治体でも自治会の求心力というのは低下し

ています。これは全国的な傾向でございまして、主には共同住宅の建設時ですね、つまり大きいマンションが建つ時に自治会が勧誘に失敗することによって加入率が下がって、元々いる人がいなくなるというよりは、どんどん入ってくる人を加入し損ねることによって加入率が下がっていく、つまり数字としてそのように現れるというような、そういう原因であると言われています。京都でも大体今、全体平均で65%ぐらいの加入率と言われていますが、都市部の方はもっと低いです。今回の調査を拝見して思ったのは、加入率が東京都で見た場合4割ぐらいということで、それを全国的に見ると低いようには見えますが、それ以外のデータを見ると、実はあんまりこう際立った特徴が実は見えないなと思いました。

その上で、実はコメントしづらいデータなんですね。ただ、それは多分、東京都というこれだけの大都会でありながら、自治会がすごく粘り強く頑張っておられる成果の表れなのだろうと思いますので、まずはこれを喜ばしく評価したいなと思います。

一方でですね、私にご依頼されているのは、地域社会のつながりづくりについてのヒントを話してほしいというふうにご依頼いただいているので、それについて少し触れたいと思います。

今の私も大学で学生に教えているとですね、学生たちのコミュニケーションがデジタル化しているということは、日々日々感じるところです。特にコロナ禍の影響で、リアルつまり対面での交流というものが減って、その分SNSとかインターネット上の交流を取っかかりにしないとつながりができないということはひしひしと感じるところでございます。そういう意味で、先ほどの都の報告の中にもデジタル化対応みたいな話をされていましたが、デジタル化することで問題が解決するというよりは、むしろデジタル化はゲームを変えた要因というべきだと僕は思っています。

具体的にSNSとかインターネット、スマホの発達が人々の行動様式を変えたと思っていまして、じゃあつながりに関してどういうふうに変えたのかと言いますと、昔は地縁、志縁ってまちづくりでよくあったんですね。地域、同じ地域に住んでいることでできる縁を地縁、同じテーマ、志を共有することで出てくるのが志縁といいました。志の縁ですね。例えば、町内会とか地縁でNPOなんかは志縁と言われていたわけです。昔はこの二つでまちづくりを説明することが多かったのですが、近年ですね、私も京都でまちづくりを見ていて日々日々感じるのは、どうもSNSとかスマホの普及によって新しいコミュニティの形が生まれていると思います。それは何かというと、気質や価値観が合うことで発生するコミュニティで、僕はこれが気が合うことが契機になって発生する縁という意味で気縁というふうに呼んでます。

昔はですね、つまりインターネットとかSNSがなかった頃というのは、地縁、つまりその住んでる地域の中でたまたま志が近い人がいて、そのたまたま志が近い人の中に気の合う仲

間がいればラッキーというようなベン図になってたと思うんですよ。大きい地縁の中に志の縁があり、さらにその中に気縁がある。なので昔は昭和っぽい価値観でいうと、気が合わない奴と喧嘩するっていうのは大人じゃなかったんです。むしろ大人のたしなみは気の合わない人とどれだけうまく折り合うかだったわけです。

ところが今の学生とか若い人を見てると違います。まずSNSとかインターネットによって気の合う仲間を集めるんです。で、気の合う仲間と集まると、一緒にいるだけで楽しいわけです。その上で、その人たちと一緒にやれる目的を考えるんです。その目的を実現できる地域を探すんです。つまり逆コースになってるんですね。昭和は地縁の中に志縁があって、志縁の中に気縁がありましたが、今逆です。気縁の中に志縁があり、志縁の中に地縁があるという状況になっていますというゲームの変化があるということをまずお伝えしたいと思います。

その意味では令和っぽいというか、自分らしくをすごく大事にする時代になっています。それで言うと、私も京都でまちづくり活動を見ているとですね、すごい人が集まっている仲間とか活動者を集めている人たちってのはやっぱりいて、そういう人たちというのは中心人物にすごく価値観を共有したりとか、気が合うぞっていう人たちで集まって作られているんですね。そうであるがゆえに、楽しいから長続きするんです。特にコロナ禍で地縁団体が活動が止まってる中、その活動の受け皿になったのが気縁コミュニティでした。子ども食堂とかそうですね。まさにその中心人物にいる人の志に共感して集まるわけです。その意味では、たくさんのボランティアの集まってしまって、実際子ども達よりも多くボランティアが来たもんだから、むしろボランティアの受け入れを停止しているような子ども食堂もあったりします。担い手不足とか言ってるのは真逆のことも起きているんです。

それぐらい格差が開く状態になっています、という状況を踏まえて、おそらく時代に合わせたつながりづくりをしていかなきゃいけないとすると、自治会には最大の弱みがあって、それがメンバーシップ型であるということです。つまり、組織に加入しないとサービスを受けられないんですね。だから、サービスを受けられないと、非加入者にとってはどんなサービスかわかんないから敷居が高い。加入してる人たちからすると、なんで非加入なやつにうちのお金使ってサービスを提供せなあかんねん、になるから、どっちにとっても不幸なんです。おそらくメンバーシップ型ではなく子ども食堂のような都度払いオンデマンド型の活動というものをおそらくこれから伸ばしていかないと、自治会という組織の維持存続、もしくはそこをコミュニティの拠点とするということが難しくなるのだろうなというのを、この調査を見ていても改めて感じた次第です。はい、簡単ですが、感想は以上です。

【小山さん】
はい、ありがとうございました。なんか自治会のことを考えると、やっぱり地縁から出発、私たちどうしてもしてたと思うんですけれども、若い方たちからすると気縁からということ

で新しい発想をいただいたかなと思います。それでは、続きまして、齊藤先生の方からマンションに関連したお話をいただければと思います。

【齊藤さん】

ありがとうございます。皆さん、改めて。こんにちは。横浜市立大学の齊藤です。私は、そこにも書いてありますように、マンション管理の研究をして 40 年でございますので、多分皆さんはうちの地域にマンションあるんだけど、やっかいだわ、何とかできないかしらと思ってますよね。ということで、今日はちょっと皆さんと一緒に考えていきたいと思います。

マンションと地域との関係の現状と課題ということでございますが、先ほどご案内ありました。でもね、この見方見ると半分ぐらいの方がもう既に交流や連携があるという意味ですから、そこから皆さんとしっかり学んでいきたいな。そして、人材とか防災の取組、集会所を使わせてねって、地域から見てのお気持ちはすごくよくわかりましたので、今日、私の話は、東京都のマンションといっても、大きいタワーマンションなんかを例に出しながら、どういうふうに地域と連携をしてるのかということを見ていきたいと思います。結構そのキーワードは、私は防災ではないかなと思っています。

さて、地域とマンションが連携していくので、私は三つの柱があると思います。一つ目の柱、さっきね、素敵なお話がありましたけど、やっぱり組織としてどう連携していくのかっていうのは一つの課題ではないでしょうか。やりたい人達だけがやる。いいですよ。でも、なかなかそれがシステムになっていかないという意味では、組織をどう連携とっていくのかというのも一つの課題かなと思って示してます。じゃあ、東京都のタワーマンションと地域、どんな関係なの？ってこちらに示しておりますが、細かい字の表を載せてますが、もうそん

なの皆さん無視してください。ただ、疑い深いあなたのために、一応調査結果がこうなっているよというだけですので、私を疑わない方はリラックスして聞いていただけたらいいと思います。はい、ということです。ですから、大体半分ぐらいの人が組織で入ってくれているマンションがマンションごとポンッと地域に入ってくれてるよという事例があるよ。でもね、齊藤さん、初めは入ってくれたのに、もうマンションごと抜けちゃうなんていう傾向があるよというのをここに示してます。ちょっと待った、入っててくれなんていうことが法的に可能ではないので、やっぱり入っててよかったなというお気持ちになっていただく、これが重要ではないかということでございました。せっかく入っていただいたら逃げられない。そして後から入っていただけるような実態としていいなと思ってもらうものをこれから一緒に考えていきましょう。

そして、二つ目の連携の柱ということで、こちらに行きたいと思います。みんなイベントをする、つまり一緒に行動をとることによって、顔見知りや仲間をつくっていくということです。ここに色んな事例も載せました。101 のタワーマンションでどのぐらいあるよとか、地域と一緒にイベントをするとかね。ここでちょっと私、面白いなと思ったのは、これマンション側から見たら、地域のイベントにまず参加してますよ。そして、参加をするっていうのと、家に来てくださいって招待をするいうのと一緒にやると。ですから、色んな連携の仕方があるけど、ご無理のないようにまずはご招待しましょう。向こう側に行きましょう。一緒にというのを、いきなりハードルを上げると難しいかもしれません。ということで、一緒にを目標にしながら相手に参加する、あるいは招待をするということで理解、相互扶助が大事かな。こうしてみますと、３割以外のマンション、７割では何らかの連携があるというのは、ちょっと皆さんのところもご採用いただけたらと思います。

そして、三つ目の連携、さっきもありましたが、マンションの中の集会所使いたい、災害の時にはあのマンションに逃げたい、お気持ちわかりますという、そういう施設を連携していきましょうということですね。公開空地を通らしていただいたら、マンションを横断できたら近道だわとか、集会所があるわとか、本当に色んな相手のものを使わせていただくということで、この三つフルセットのマンション、こういう地域と連携してるの、マンション側から見れば 15%。でも逆に言うと全く連携がないのは３割ですから、できるものから連携をしていくということが重要ではないでしょうか。いきなり三つのフルセットはもうね、理想ではございますが、なかなか難しいと思います。

じゃあ、どんなマンション、これはマンション側から。皆さんは地域側からいつも思っておられると、マンション側の理屈を見ていきますと、どんなマンションが地域と頑張ってやってるのということを見ますと、細かいわね、齊藤さんと思われてると思います。ごめんなさい。結論的に言いますとね、色んなマンション、ここがちょっとポイントが効いてますよということなんですけれども、一つはマンション自体がしっかり管理してるところです。自分のところがしっかり管理してないところがもうよそにね、地域に出ていくことができませ

んと。まずはマンションの方がおられたら、まずはしっかり自分のマンション総会に出たり、イベントをしたり、管理をしっかりしましょう。そして初めに作った時からこういう風に話し合いの場があって、地域の人が何を求めてるかというのを捉えて作っていただくと使いやすい施設になってますよね。

そして地域の人としっかりとお互いに協力し合いましょうねって連携をしているというマンションが積極的だということになりますので、後でもお願いしたいと思いますが、地域の人が頑張るとともに、ぜひ自治体の方もご協力いただきたいと思います。

でもね、うちのマンションに地域に開く施設なんかないのよね。おっしゃられると思います。確かに行政さんが地域に開いてくださいねというような制度を持ってると、やっぱりそういう施設を持っているということがありますので、ぜひ皆さんが努力をされる、その後ろをぐいぐいと押してあげるような、行政の地域とマンションが連携するような政策もご用意いただけたらと思います。

マンションから見たら、皆様、マンションとなんか仲良くしたいな。マンションの方にも何がなかなか地域と連携できませんかというふうに聞きましたら、役員の負担が大きいのよね。ここにはちょっと後でまた皆さんと一緒に考えていきたいと思います。でも、やっぱり根本的に共通の課題がないというふうにおっしゃられてる。

でも、防災災害というのは、マンションは宙に浮いてるわけではない。地域と一緒にやらなきゃ意味がありませんので、ぜひ楽しみながら、防災カフェや防災街歩きなど共同でやっていって、一緒にやっていったらいいんだよねということをぜひ実感していただく。そして、やっぱり作る時からそういう関係を作っていくような場と機会が必要ではないかなということで、東京都さんの調査結果から私の調査も踏まえて、まず発言させていただきました。ありがとうございます。

【小山さん】
はい、ありがとうございました。今のお話はですね、私、マンションとの連携って考えると、結構お祭りを一緒にやるとか、何かイベントからちょっと頭考えてしまってたんですけど、それこそ公開空地を通り道にしましょうみたいなところの話し合いからっていうことで考えると、何かマンションが持ってるものってすごく可能性が大きいということですよね。

そんな風に発想を転換すると、一緒の地域の仲間として最後の防災っていうところ、すごく目標ですけど、ちょっと最初からだとハードルがやっぱり高いので、そんなところからっていうお話だったかなと思います。それでは今日もう一つのポイントとなるようなデジタルツールを使うっていうところで、先ほどの結果でもですね、2000 年以降やっぱり自治会さんもホームページ作ったり、色々対応されてると思うんですけど、数字的にはやっぱりそん

なに進んでいないっていうのが数字に表れていたところかなと思います。その辺り、小野先生の方からお話しいただければと思います。

【小野さん】

はい。ちょっとお二人の後でなかなかお話がしづらいところがあるんですけども、私の方からはデジタル化について、今どんなことが起こってるのかということをまずは簡単にご紹介させていただきたいと思います。

先ほど沼倉さんにご紹介いただいた調査結果の最後のページを見ていただきながら聞いていただけるといいかなと思います。私は都市計画、まちづくりの専門家として、現場でですね、自治会の方々と一緒にまちづくりをしたりですとか、あるいは私自身もですね、自治会の組長を泣く泣くやったりしていく中で、特にコロナ禍でやっぱり自治会さんがなかなか直接人と会うのが難しくなっていく状況の中で、試行錯誤をしながらですね、デジタルツールを使うようになっていく、その過程をなかなか横展開ですね、情報共有しづらいというところもありましたので、今何が起こってるのかというのをですね、自治会さん、それからアプリを開発している企業さんにお話を伺ったり、あるいは自治体さんにお話を伺って、今こんなことが起こっているということを今調査しているようなところです。

全国的に見て、どれくらいこう自治会のデジタル化が進んでいるかというデータはほぼないような状況で、総務省さんが少しデータを出していたりもしますけども、実は私が今います愛知県の豊橋市で、つい先日ですね、全自治会長、四百数十名にアンケートを行って、どれくらい進んでいますかというのをやったんですけども、その結果がですね、今回ちょうど東京都さんのデータとほぼ同じような傾向でした。LINE とかですね、SNS を役員の方々で利用してるという自治会がだいたい半分ぐらいですね。さらにそれを自治会の住民、自治会の

会員全体にさらに展開して、みんなで使うと言ったようなことをしてるのがさらに減って、全体の１割ぐらいということで、豊橋、地方ですけども、地方も東京都もおおよその傾向というのは変わらないんだなということを今回のデータを見ながら思いました。

今回のデータでもう一つ、導入の予定が無い場合の理由というところでですね、やっぱりデジタル活用を進めても高齢者の方が多いので、使いこなせないんじゃないかとかですね、そういう人材がそもそもいないっていうような不安がここで挙げられているんですけども、ここはですね、結構もっと複雑な心境がアンケート結果から出ていて、不安がある一方で、デジタル化への期待というのは、かなり皆さんが持っている。

デジタル化を導入することによって、若手がもっと入るんじゃないかとかですね、これまでのやり方がもっと新しいことができるんじゃないかという期待も同時に抱えていて、そういう不安もありながらも期待とかですね、あるんで、そこら辺の自治会長さんとか住民の方々の意向っていうのをもっと丁寧に見ていくことで、デジタル化、もっといいような形で自治会に導入していけるんじゃないかなと思っています。

もう一つですね、今ちょっと豊橋との比較ということでお話しさせていただいたんですけども、じゃあ全国的にどういう動きがあるかっていうのを見てみるとですね、こういうLINEとか、あるいは自治会の専用アプリというのもかなり今出ていますが、こういったものを自治会さんの独自の取り組みとして導入されてるようなところも非常に多いんですけども、一方で行政、自治体ですね、自治体さんの主導で各自治会に導入してると言ったようなところもかなり増えています。

それからですね、面白いのは、そういった自治会の活動ってのは、行政の活動と切り離されない、連携って非常に重要なところで、新たにですが、その間に代理店が入ってるようなケースもあります。この代理店というのは地域のインフラ系の会社ですね、電力会社さんですとか、ケーブルテレビさん、そういった地域を支えてるインフラの会社が、自治会の活動と行政の取り組みをつなぐような形で、新しい地域の自治のあり方というのも生まれ始めてるなというのも非常に面白いところかなと思います。

やはりですね、その導入の動機として挙げられるのは、やはり役員の負担が非常に重いので、そこの負担を軽減したいといったようなことも挙げられますし、これまでにもお話が出てきました防災ですね。災害時に誰一人取り残したくないということで、そういう災害時に使いたいという思いで導入されてるところもかなり見受けられます。そういった時はですね、自治会さんだけではなくて、行政の方もですね。石川県の、ちょっと名前を忘れてしまったんですけども、西日本豪雨の際にですね、行政の方から自治会長さんに避難所の開設の連絡をする時に、やっぱりそれまでは一軒一軒に電話でやっていたのをですね、それでも全然間に合わないので、一斉に送信して、お互いにこう開設したよって確認もできるような、そう

いうことをやりたいっていうような動機で導入されたような、そういうところもあります。

実際、能登半島でもですね、自治会さんでそういうデジタルツールを活用して避難所の運営を円滑に行ったり、そういう取り組みも見られますので、是非このデジタル化というのはもちろんですね、本当に先ほどの話もありましたけども、これまでと違う繋がりとかっていうのも出てくると思いますし、やっぱりまだまだ使いづらいという人もたくさんいると思うんですけども、新しい自治会のあり方というところにも非常に大きな可能性が広がってると思いますので、今日この場でも是非皆様と一緒に議論できたらいいかなと思っております。はい。私の方からは以上です。

【小山さん】
はい、ありがとうございます。今のお話の中では、やっぱりデジタルっていうのがなかなか増えてない状況も数字にも表れてる通りなんですけれども、専用アプリっていうのが様々出てきているっていうところと。そこをですね、自治会独自でやることもあれば、自治体さんが後ろから後押ししてると。その例の中で間に入っている地域の企業さんだったりっていうところが、支援してるっていうような例もあるっていうことで。なかなかですね、私自体もアプリを導入した自治会さんにインタビューしに行った時に、そこはすごくいい事例として紹介されているようなところだったんですけれども、実際１年経ってみると、担当の役員さんさえ、ちょっと若干、何て言うんですかね、一回入れなくなっちゃったら、もう入り方が分かんなくなっちゃってたりしてね。そんなこともあったんですね。そうすると、やっぱりいつでも何て言うか、相談できる中間の存在っていうのがあると、やっぱりもう少し使い勝手が良くなるのかななんていうところで、今のヒントをいただいたかなと思います。

それではですね、本当はもっとすごく色々とお聞きしたいんですけれども、お三方の先生方から、まず谷先生からは気縁というお話が出てきたりして、若い人達の繋がりの作り方、これがある意味では個人発信というかですね、ここがこう繋がっていくっていうところから始まって、それが最後地縁に落ちてくるみたいなふうにちょっと変わってきてるんじゃないかっていうところだったり、あるいは齊藤先生の方からマンションっていう、割とどこの地域でも東京の中だとある意味では問題になっていたりとか、ある意味ではすごく可能性を持っている存在として、そこでは個人の繋がりというよりも、自治会とマンションの管理組合とか、組織同士の繋がりっていう話になってきますし、最後のデジタル化っていう部分では、結局は各自治会さんが頑張って取り組むところなんですけれども、ちょっとそういう支援みたいなものがやっぱりあった方が進んでいくんじゃないかっていうところで、自治会とか別の色んな組織っていうところだったりとかって、やっぱり色んな個人個人だったり、色んな繋がりっていうものをうまく作っていかないと、ちょっと個々の組織だけではなかなか解決がやっぱり難しくなってるのかなっていうところが少し全体としては同じところにお話が落ち着くのかなと思いました。

これは総務省のコミュニティに関する研究会なんかでもデジタル化と協働っていうところを今後の取組の一手として出しているところで、やっぱり今のお話も色んなところと協働していくっていうことが一つ重要なのかなっていうことも見えてきたかなと思います。

それでですね、もう本当に無茶ぶりな会ではあるんですけれども、それを踏まえてですね、少し他の先生方のお話だったりとかもお聞きになったところで、じゃあどうしていったらいいのかなっていうところ、解決、色々困っている状況というのは数値にも表れていたところ、ただし、例えば防災だったり、皆さんが興味関心あるところで色々と繋がりが作れるかもしれないなんていうヒントが色々出てきたところなんですが、お三方の先生方からですね、ちょっとそれぞれの分野に引きつけて、こんなことが今後少しコミュニティの発展というか、ある意味では私は維持っていうところが目標だとは思っているんですけど。というところでヒントを頂ければと思います。それでは、齊藤先生の方はまた資料あるということで。

【齊藤さん】
ちょっと無口なもんですから、資料をご用意してまいりました。はい。無口も最近六つの口と書くかもしれませんね。はい、ありがとうございます。自治会・町内会の活性化のために、ということで、ちょっといくつかのヒントということで持って参りました。

実はこれはマンションの管理組合では当たり前にやってるんだけども、自治会でもこの取り組み見られますよ。えーって思うかもしれないけど、マンションの管理組合も輪番制にしている。毎年人が変わっただけなんじゃないの？というから、役員経験者を顧問会にするとか、専門委員会、そして役員以外にボランティアを募集して色んな役割のチームを作ったりしてますよ。それから運営の仕方に工夫ですね。やっぱり働いてる人が役員になるということを考えると、少しオンライン会議などデジタルを上手に使っていきましょう。そして、若い人が関心持ってくれないんだよということで、やっぱり何をしているかという広報をしっかり充実させていく。その時に、先ほどからあるようなデジタルツールを上手に使っていく。

そして最後の５番目注目。マンションの管理組合でも大学生が理事になったりしてるんです。えーって私も思いました。先生、私ね、マンションで理事になりましたってゼミ生に言われた時に、何言ってんのこの子と思いましたけど、本当に理事してまして。最近横浜で中学生が自治会の役員している事例。面白くてたまんないって言って、友達もやらないと言って、巻き込んでいって、そこでは結構皆さんあるわけないないと思ってるかもしれませんが、そんなことがありますから、ちょっとやはり役員のなり手不足問題、皆さん共通で悩んでいると思いますが、こういったところにもちょっと発想の転換が必要かもしれません。

若い人が考えると、若い人が来たくなるような企画してくれますよね。そして、ちょっとさっきちらっと言いましたが、役員以外にもボランティアでお手伝いしてくれる人、募集しますという自治会も最近増えてきてると思います。一般的な自治会に調査をしたものなんで

すが、ついこないだ自治会のボランティアに登録した瞬間に、登録したら自治会が身近に感じるようになったよという方が９割、そして登録して自治会の活動の内容を知ることによって何か印象が良くなったという方は８割ということですから、まず知ってもらうきっかけにもなるのかな。

そして次を見てください。こうして実際に参加をするということになって、身近に感じて、将来役員をしてもいいかなという予備軍が増えてきた。ちょっと年齢の高い人ではなく、むしろ 40 代、50 代現役バリバリ世代にこの傾向が出てきているという調査結果ですよということでございます。

こうしたボランティア、つまり参加のハードルを下げるというのも一つかなと思います。そしてもう一つ、皆さんマンションと町内会・自治会、地域とどんな連携があるのかな、私が実際に行ってみて、お話を聞いていいなと思うものを集めてきました。皆さん、どれがいいですか。確かにマンションから見たら花火よく見えていいだろうな、地域の人を花火大会にご招待しようなんていうのもありましたし、イベントも一緒、防災訓練も一緒。私が好きなのは、近所のパン屋さんで、売れ残りそうなパンを集めてきて、マンションで、エントランスで売っていると。マンションの付加価値にもなりますね。

そして移動スーパーとかキッチンカー、結構マンションで出してるんですけど、そういったものをマンションのエントランスに来てもらって、地域の人が使える、地域にとってもメリットがあるし、地域の人も使うからということで、お店も来てくれるわけですから、ウィンウィンの関係、つまりちょっと工夫をするとウィンウィンの関係が作り上げていけるのかな。

あと多いのが、マンションの中で夏祭りする時に、そのお店に近所の人の店が出てもらうみたいな形で、双方が知り合う機会を楽しんで作るというのも素敵な事例が出てきました。

さあ、この事例は何かと言いますと、これは横浜の事例なんですけれども、マンションの中に地域と一緒に活動する組織を作って、実際にマンションの中に地域貢献の施設を作って、そしてマンションの中で地域と一緒に活動しているというところでございます。

そこで、地域の人に聞きました。あのマンションできてどう思う？色々使ったりしてる？はい、おかげさまで色々散歩してますとか、通行してますと。マンションができて明るくなったし、防犯上も良くなった、なんていう嬉しい声も聞こえています。町の活気もできたしねって、何となく敵に思ってたマンションが一緒に活動したり、作る時にちょっとこんなものを作ってほしいわなんて意見を言うことによって、マンションと地域のいい関係がいつもできて、マンションの中からも地域とつながることによって歴史や文化が分かっていいというお声が届いてると。疑い深い人、後でじっくり見てください。

そして逆にですね、これ東京都の方のマンション、再開発したマンションですが、こちら

は地域の方にね、マンションの人が入れる受け皿の組織を作り、地域の方にマンションの人も使える地域拠点を作り、地域の方の情報をマンションにもフリーペーパーとしてお届けしているという事例です。

今度はマンションの方に聞いてみました。地域のイベントに参加することありますか。あるという回数が多い人ほど、やはり地域に対する愛着や想いやりが増えてきている。そして、地域の色んな情報をローカル紙で見ることによって、地域ってこんな活動してるんだなと知る機会にもなって、お店にも行くし、地域のイベントにも参加するということで、なんか縁もゆかりもなくて、たまたまマンションに引っ越してきたんだけど、何か地域に愛着を感じるようになってきたわということを言ってくださっているという事例でございます。よく後で、虫眼鏡で見ておいてください。

さあ、こうして見ますと、やっぱり今日ご紹介しましたように、お互いのマンションと地域のお互いの参加のハードルを下げる、お互いにまず一緒にって、難しかったらご招待しましょうよ。相手がどんな人がいるのか、どんな顔が見えてくる。そして参加にも多様な参加がある。そして参加者にできれば役割なんかあった方が参加しやすいですよね。いやいや、マンションから来てくださるんですか。じゃあ、ちょっと時間とりますから。こんなマンションってどんなことしてるかなんてというような役割があった方が行きやすいというのもあるかもしれませんし、何をやってるかわかんないところに来てほしいとか、関心を持ってっていうのは難しいですから、ぜひ情報の発信をお願いしたいと思います。

そして、今日は行政の方も来ていただいてるということですから、今日ご案内したように、やはり地域とマンションがうまくつながっていくには、地域、マンションをつくるときに、そんな話し合いの場、そして地域の方のご意見が反映できるような制度や仕組み、そして一緒に活動できるようなサポート体制をつくっていただく。特に、やはり共通の課題は災害だと思いますので、そういったところの活動に支援をしていただけるということがあったら、より双方がウィンウィンの関係をつくっていただけるんじゃないかということで、まずは今日皆さんからご紹介いただけてる、何かいいなと思うものをひとつでもいいからトライしていただきたいというのが私からのお願いになります。ありがとうございます。

【小山さん】
はい、ありがとうございます。この最初のですね、若い方が役員になってるっていう話がありましたけれども、海外の事例でもですね、若い、引っ越してきたばかりの方にそういう住民組織を任せてしまって、すごく刷新するみたいな例もあったりですね、何か新しい風、担い手がいないっていうことが言われてるし、そうなんですけれども、実は東京都は住んでいる人はいっぱいとにかくいますので、もう少し担い手の幅を広げてみるっていうのも一つ今のお話であったかな。

私も近くの自治会さんのお話を聞いたときに、夜見回りを、防犯の見回りをする隊があって、もう本当に高齢化、80 歳ぐらいの方がみんなやってるんですけど、ある時、小学生の子がやってみたいって言って来るようになってくれたってことなんですね。それがもう私たちやめようかって言ってたのに、一人その子が来るようになったおかげで、みんな元気に来るようになって、それがまた子供にもすごく、何て言うんですかね、ああ来てくれたのってことで、子供も大喜びで参加してるっていうような事例がありました。とにかくそういう少し何か変わっていくきっかけっていうのが、やっぱり若い子だったり、子供たちってところにあるのかなと思いました。

最後のお話。先ほどともつながるところですけれども、さっきの若い人もそうだし、マンションっていうのもやっぱり普段の町会・自治会さんとは違うものを持っていて、そことやっぱり一緒にやっていくっていうことの楽しさというか、そんなものがまたデータにも出てきてるのかなというお話でした。それでは小野先生の方からよろしくお願いします。

【小野さん】
はい。齊藤先生のお話の中にもデジタルとお話あったんですけども、デジタル化というのは決して目的ではなくて手段ですよね。じゃあ一体どういう目的でこのデジタル化を進めていくのかというのがやっぱり大事かなと思います。

つい先日ですね、情報系の専門家の方とお話しした時に、その時はデジタルトランスフォーメーションという言葉を使ったんですけど、要はデジタル化が一体どういう目的というか、段階として進んでいくのかというお話で、やっぱりまず第一にはですね、第一段階目のデジタル化というのは、既存の今あるワークフローというか、今やってることをデジタル化することで作業を効率化するとか、負担を軽くするっていう、そういうのがまず第一段階目ですね。

でもそれは本質ではないと。本質的には次の第二段階目が重要で、デジタルだからこそできること、デジタルだからこそ生み出せる価値というものをきちんとみんなで作っていく。これがデジタルトランスフォーメーションの本質だというようなことを伺いました。
まず一つ目の、第一段階目のデジタル化ですね。これは例えばですね、先ほどもありましたけども、役員間での連絡とかですね、いわゆる電子回覧板を使う、それから電子決裁を行うとかですね、会議をオンラインでやると。こういうことによって役員の負担を減らしたり、若手に参加してもらいやすくしたりということができるかなと思います。

とはいえですね、私自身もこの研究チームで豊橋の 3000 世帯ぐらいが住まわれている自治会で、この第一段階を一緒にやってるんですけども、それすらもね、非常に難しい、なかなかアプリを導入してもらうの難しいというところがあって、でもこれは成功事例が全国にたくさんあります。やり方は色々なんですけども、代理店さんが入るようなところももちろ

んありますし、自治会にデジタル担当、ＩＴ担当というのは得意な人ですね。その担当者において、その人を中心にやってもらうとかですね、そういう色んな工夫がありますので、ここはみんなで工夫してやればできるところかなと思います。

それが進んだら、今度第二段階目ですね。デジタルだからこそ可能になる自治会のあり方、やっぱり自治会というのは、地域住民の声が、自分たちが住んでる地域社会を決めていく非常に重要なプラットフォームだと思います。それが本当に今できてるのか、もっとやりようがあるんじゃないかというところがこの第二段階目の重要なところだと思います。

で、まだまだ萌芽の段階ですけども、例えばその第一段階がうまくいってですね、非常に負担が減ったので、住民の交流を行うようなイベントに力を入れてるという自治会さんもお聞きしています。そのイベントにですね、少し YouTube を使ったりして、対面のイベントなんだけど、情報系のツールも使っていって、そこで子供たちが積極的にどんどん使って配信してくれるので、非常に若手が自治会の活動に参加してくれるようになったというお話も伺っています。

それから、先ほど能登の地震の際のデジタル化の活用もありましたけども、こういうアプリを使うことによって、新しい地域防災、共助のあり方というのも少しずつ生まれていますので、新しい自治会のあり方というのをぜひ一緒に考えていける、今そういう段階に来てるのかなと思っています。

【小山さん】
ありがとうございます。第一段階と第二段階があるっていうことで、なんとなくデジタル

化で作業効率のことばかりが話としては出てくるかなと思うんですけれども、やっぱりその先のプラスアルファの価値っていうもの、ここがですね、私なんかもそんなにデジタルが得意じゃないので、逆に言うと発想が難しい。こここそ、さっきの若い人たちだったりとかっていうのも発想がそこからスタートしてますので、そういうところで一緒に何かもう今YouTubeを任せてしまうみたいなお話もあったんですけれども、そんなことを子どもたちとか若い子たちが楽しんで参加できる一つのデジタル化っていうのがツールになる可能性もあるのかなっていうふうにお聞きしました。ありがとうございます。では、谷先生の方からよろしくお願いします。

【谷さん】
はい、ありがとうございます。じゃあ、どうしていったらいいのか。非常に難しい問いでございまして、大きく二つ、考え方の話と具体策の話をしようと思います。

まず考え方の話なんですが、私も全国の自治体に詳しいわけではないので、私が働いている京都ではどうしてるかっていう考え方をお伝えしたいと思います。まず京都市ではですね、自治会というものをとても大事にしておるのですが、加入率というものを最重要指標とはしていません。実は平成期は結構重要視していました。加入率至上主義と言ってもいいぐらい、加入率を報告書とかレポートのすごい重要なポジションに置いていたのですけれども、最近令和になってからやめました。

というのも、加入率を前に出しすぎるとですね、自治会の方々に加入させることが善であるという誤ったメッセージをどうも与えてしまっているということと、加入率が低い地域、すごくいい活動を頑張っているのにもかかわらず、加入率が低いがゆえにすごく自尊心を失っている自治会があるということが、やっぱ京都市内でも問題になりまして、いや、加入者はもちろん大事なんだけれども、加入率絶対主義やめようねという考え方をとってます。

京都市ではコミュニティ活性化に関しては、条例を作っておりまして、その中でコミュニティというものを、人と人とのつながりを基盤とした地域社会というふうに定義しています。いわゆる自治会みたいな組織じゃないんですよ。あくまでも人と人とのつながりを基盤とした地域社会ですから、個人間のネットワークの積み重ねの先にコミュニティがあるんだよというスタンスをとっています。

じゃあその自治会っていうのはなぜ重要なんですかっていうと、その人と人とのつながりを助ける装置として大事なんですよ。手段として大事なんですよという考え方なので、極論、加入率がめちゃめちゃ高かったとしても、入ってる人たちが満足していないとか、加入したくないなと思っているような組織だったら、やっぱりつながりづくりという意味では十分な機能を果たしていると言えないので、どちらかというとまずつながりの方を大事にしましょうねという考え方で今、京都市は進めています。その意味では、先ほど冒頭で申し上げた気

縁コミュニティの考え方に近いのかなと思ってます。

それを踏まえてですね、具体策ですが、ちょっと二つほどお話をしようと思っていまして、じゃあどうしたらええねんなんですが、一つ目はですね、手挙げ方式で部活を作るというのがお勧めかなと思っています。これは先ほど齊藤先生がおっしゃっていた自治会の中に専門委員会を作るのがいいというアイデアがありましたが、それに近いかなと思っています。京都市の伏見区というところで醍醐地域というのがあるんですけど、そこがですね、新しく就任された自治会長さんが全然その脱サラというか、サラリーマンを退職されて自治会に入って、それまで全然地域に関わったことがなかった方なんです。それ故に何をしたらいいかわからない。困っちゃったんです。

なのでやりたい人を募集しようってなったんですね。なので地域のことでこういうことをやりたいですっていう人、手を挙げてくださいって言って、その人のやりたいことを聞き取って、それを部活にしてその部活に一緒にやりたいよという人に集まってもらって活動してもらうということをやりました。そこに自治会としてお金を出しますよなんですね。そんなことしていい活動なんて出てくるんかいなと思われるかもしれませんが、例えば男の料理教室部とか、溝掃除部みたいな。おそらく従来の自治会活動ではなかなか出なかったようなものが前に出てくるようになりました。溝掃除部に至っては、その活動をやってる方の一人が重機まで持ち出してですね、こうやって溝を掃除してくれたという話もあったりします。やりたいことと愉快な仲間がいるから組織に入るという順序があるというふうに、京都市では考えていいんじゃないかなと思っています。

ちなみに、色んな地域活動の動機に関する研究を見ていても、地域への愛着って活動の原因にどうもならないっぽいんですよ。愛着あるよっていう人がまちづくりするわけではどうもないらしいんです。ただ、まちづくり活動をすると愛着が高まるらしいんですよ。順序逆なんですよね。なので部活でも何でもいいから、地域で活動することを通じて地域に愛着が芽生えれば、結果としてもしかしたら組織に入る人も出てくるかもしれないねぐらいの心構えでやっていただければいいんじゃないか。そういう部活をやりたい人だったりとか、部活に参加したい人を集める手段としてデジタルというのは効くんじゃないかなというふうに思います。

もう一つがですね、先ほど小野先生もデジタル化の普及のためにインフラ企業が間に入って貢献しているよという話がありましたが、これすごく大事な示唆があると思っています。自治会もボランティア原則でやるにはやっぱり限界があります。ボランティアでやり切ろうとするからしんどいんだとすると、やはり専門的な組織だったりとか、事業者によって運営される部分があるだろうと思っています。例えば京都なんかだと、電気施設だったりとか、高齢者施設が自治会の役員を担うことで、自治会のネットワークを使って、自分のところの事業所の、例えば高齢者向けの福祉サービスが十全にできるようになっていくという話はち

ょいちょい見られるようになってきました。

　どうしてもその企業の方に自治会に入ってもらおうとすると、皆さんお金を取ろうとするんです。いや、お金はそんなにこの際重要じゃない。京都でも色んな自治会の会計見せてもらいましたけど、割と内部留保されてるんですよ。使うことがないので。だったらお金はさておき、ちゃんと企業、つまり専門的な生業と専門スキルを持っている方に役員をやっていただく。そして、その事業者のやろうとしていることに自治会も協力するみたいなボランティア原則から一歩抜け出すような考え方もあっていいんじゃないかということは、ひとつご提案しておこうかなと思います。はい、私からの話は以上です。

【小山さん】
　はい、ありがとうございます。一つ二つ大きく違う話、逆側に振れた話だったかなと思ったんですけど、手挙げ方式っていうのは新たなボランティアというか、自分たちの興味あるところでやりましょうっていう話と、もう一つ、やっぱり自治会さんになってるところかなり幅広いので、ボランティアだけでの原則だけでは無理ですよねっていうところの企業さんだったりとかに入ってもらうっていうのも一つ。東京都だと地域によっては結構企業さんあるところもあると思うんですよね。そうするとそういうところに関わってもらうっていうのも一つ手なのかなということですね。

　CSR なんかも必ず何かやらなきゃいけないみたいなところ出てきてますし、学生とか子どもたちも大学入るためにボランティア経験を言わなきゃいけないみたいなことも結構あるんですね。なのでそういうところもアプローチとしては少し目線を広げていくっていうのも、実は地域の中にすごく資源が眠っているっていうところが、今日のお三方のお話から見えてきたことかなと思います。では、ちょっと少し、だいぶ時間は予定の時間を少し過ぎてしまったんですけれども、これでこの第一部パネルディスカッションの方を終わりにしたいと思います。先生方、ありがとうございました。

第２部：事例紹介･トークセッション

【ファシリテーター】

･小山　弘美 氏　　関東学院大学社会学部教授

【事例紹介団体】

･馬込三本松町会　（大田区）

･高瀬住宅自治会　（町田市）

【パネリスト】

･津賀　　高幸　氏　株式会社ダイナックス都市環境研究所

･中山　　エミリ　氏　タレント

【司会】

それでは時間になりましたので、これより第二部、事例紹介・トークセッションを始めます。

まず、事例紹介にてご説明いただく団体の皆様をご紹介いたします。

大田区の馬込三本松町会

会長　菅田裕様、

副会長　金本高幸様、

役員　渡邉祐子様、

町田市の高瀬住宅自治会　会員　藤林文男様、

同じく町田市の晴見台自治会元会長松本良彦様です。

次に、トークセッションのパネリストの皆様をご紹介いたします。

株式会社ダイナックス都市環境研究所　津賀高幸様、

タレントの中山エミリ様、

そして、ファシリテーターは、パネルディスカッションに引き続き、関東学院大学社会学部教授　小山弘美様に務めていただきます。

それでは、ここからの進行は小山教授にお願いします。よろしくお願いいたします。

【小山さん】

はい、それでは第二部というか、先ほどのお話とも結構繋がってくる部分があるのではないかと、すごく期待しているんですけれども、事例を紹介していただいた後に、こちらのト

ークセッションということでしていきたいと思います。
　それでは、もう早速なんですけれども、大田区の馬込三本松町会さんの方から事例の方を紹介していただければと思います。よろしくお願いします。

【馬込三本松町会】
　はい、ではよろしくお願いいたします。私ですね、人の前で色々しゃべったりとかあんまりしないので、めちゃくちゃ緊張しているんですけれども、第一部でですね、先生方が非常に刺さるお話、うちの活動ともダブる部分とかたくさんありまして、いっぱい刺さったつもりなんですけど、何しろここで何を話そうかっていうことを考えてたんで、半分ぐらいしか刺さってません。なので、後でアーカイブ見て、またぐっさりさせていただきたいと思います。

　まずうちの町会でやっている活動としまして、こちらですね、町会会館開放という形で町会会館を町の人たちに気軽に上がっていただこうという形で親しみを持ってもらうという形でやらせていただきました。私が町会に入った時から、もう 14、5 年経つんですけれども、まず 80 代、70 代の方が、主力の方がもうそれぐらいになってきて、いかんせんちょっと若い世代が少ないということが町会の課題となって見えてきているということなんですね。やはり町会っていうものがそもそも何をしているのかというところが非常に見えづらいというとこがあるんですね。

　それで、その中で皆さん、町会・自治会、色んな活動をされている中で、町の色々小さなことから大きなことまで色々やられていると思うんですよ。防犯、防火活動とか、それからうちの方で言えば落書きを消したりとか、そういったことを色々やっているんですけども、

でもそういうところって結局目に見えてないんですよ。一人暮らしの単身赴任の方とかというのは、私はここに会社に勤めてるだけだから、いるだけだからっていうそういう方たちって、やっぱり町会って何してんのっていう話になると思うんですよ。だからマンションとかでも町会に入らないことになりがちなんですけど、そこで私がいつも言うのは、じゃあなぜこの町に越してきたんですかっていう話なんですね。住みやすそうだからとか、色々あると思うんですよ。その住みやすくしてるっていうのは、やっぱり町会・自治会がきれいに機能しているからなんですね。なので見えないのは、町会がきれいに静かにやってるから、皆さんが住みやすい街になってるんですよというような話をするんですけども、それ皆さんには言えません。

なのでまずその町会でやるべきことっていうのは、町会を活動が見えるようにということで、まずその見える化っていうものをやっていく。うちの町会の場合には天祖神社っていって、神社の中に町会会館があってということで、一般の人が非常に入りやすい環境にあるんですね。なので神社にお参りに来ていただいたついでに、町会会館にも馴染んでいただきたいということで、町会会館を気軽に上がれるようなイベント等を考えた中の一環がこちらの町会会館開放であります。というところでバトンタッチ。

【馬込三本松町会】

すみません、副会長の金本と申します。今回の会館開放なんですけども、会長の方から、ではどのようにしたら子供たちが行きやすい場が提供できるかという相談を受けまして、一度春休みにですね、今回こちらのやったものに関しては夏なんですけど、一度春休みにやったんですけど、やっぱりなかなか子供たちが気軽になかなか来てくれないというところで。高校生に声かけようと思いまして、どのように声をかけたかと言いますと、青少年対策委員

会っていうのがありまして、そこで地域のイベントを行った際に、そこの高校生たちがそこにボランティアで参加されてたんですね。

その高校生たちが結構積極的に丁寧に仕事をこなしてたのを見て、ああ、この子たちにちょっと声かけてみようかなというところで、校長先生にお声かけさせていただきました。そうしたところを校長先生もぜひご協力いたしますということでお答えいただきまして実現することができました。今回、子供たちが全体で 55 名ぐらい来たんですけれども、やはり高校生のお兄さんお姉さんがいるということで、とても入りやすい環境だというふうに子供たちも言ってくれまして、結構にぎわいが感じていただけることになりました。

役員の方には、じゃあ高校生ボランティアを入れてみたいんですけどって言った時に、やっぱり役員の方もいきなり高校生ボランティア来てやってもらうというのは、やっぱりなかなか抵抗があったので、そこは僕の方で会館にですね、プロジェクター等ありましたので、そこでプレゼンテーションを何回か繰り返しまして、丁寧に説明をさせていただいて、実現することができました。

やっぱりちょっと今までうちの会館では紙を配って説明するだけっていう形式で、なかなか知ってる人たちだけが納得して進めていって、あとの人たちがちょっと置いてきぼりみたいな感じになってたんですけども、それをすることによって、皆さんの方にもちゃんと浸透して、納得して実行できたという経緯があります。ではですね、実際にやった内容について、ちょっと渡邊さんの方からご説明いただきます。

【馬込三本松町会】
はい、それではスライドの１をお願いします。地元の高校生と地域の子供たちが一緒に遊んでいる写真になります。

２の方をお願いします。お菓子をご用意いたしまして、一日一人いくつだよとか、そういう感じで取っていただいたりしたんですけども、これはちょっともてなさないといけないかなというふうに、今までお祭りとかの経験からそういう風に用意するっていう流れになったんですけど、案外なくてもいけたかもしれないという、そんなに遊ぶのに夢中でお菓子を食べる時間がそんなになかったりという面も見受けられました。

それでは４をお願いします。初日に子供たちと、あと出張所の方と一緒に掃除、境内のゴミ拾いですとか、会館内の掃除をしていただきました。あとは秋祭りの準備ですね。法被を数えたりとか、何が足りないとか、そういうのに荷物を運んだりするのも手伝ってもらう。やっぱりもてなすよりも仕事があると、とても生き生きと皆さん参加してくださるというふうな印象が当初の予定よりもありました。

３番お願いします。地域のベーゴマおじさん、ベーゴマおじさんって呼んでくださいって言ってくださったので、ベーゴマおじさんがベーゴマをたくさん持ってきてくださいました。この方は役員さんではないんですけれども、ご近所の方でぜひそういうイベントがあるなら呼んでくださいって言ってくださって、子供たちも初めての遊びにやり方を教えていただいたりして楽しんでます。

それでは５番お願いします。私が盆踊りなどの指導をしているものですから、せっかく集まってくれた高校生のボランティアの方々に二人ずつとかそんな感じで合計６人ぐらいしかちょっとできなかったんですけど、まず着付けの体験をしていただいて、興味を持っていただく。せっかく浴衣を着たので、盆踊りのちっちゃい輪を作って、簡単な曲を一緒に踊ってみているところですね。

６番お願いします。こちらもベーゴマなんですが、東京ベーゴマというボランティア団体さんがありまして、さっきのベーゴマおじさんとは別に、最初にイベントとして用意していた会になります。結構参加者も多くて熱中してやっていらして、もう用意した麦茶も飲まないで必死にずっとやってらしたっていう話を聞いております。

最後に７番は交通指導のイベント。発案者の菅田会長からご紹介をお願いします。

【馬込三本松町会】
町会と警察、消防、役所、色々強力なつながりを持っているというアピールで、ちょうどこれから交通社会に出るという高校生の子供たちもいっぱいいたので交通安全教室をやり

ました。次のスライドお願いします。このように白バイも出していただいて、また近隣の企業さんにスペースをお借りして、このような形でやりました。右端の下に様子の悪いアロハのおっさんは私です。はい。そんな感じで今後とも続けていくことが大事かなと思っております。はい、以上です。

【小山さん】
　はい、ありがとうございました。微笑ましいというか、子供たちがやっぱりこうやって参加してるのを見ると、こうなんかワクワクするというか、やっぱり大人も一緒に楽しめるような場になってるんだろうなというふうに感じました。ありがとうございます。また後で色々とお聞きすると思いますので、引き続きですね、町田市の高瀬住宅自治会さんの方から事例紹介をお願いいたします。

【高瀬住宅自治会】
　それでは、ご紹介いただきました町田市の高瀬住宅自治会の藤林でございます。まず、皆様方に今日資料が配られてると思います。この資料の 19 ページに高ヶ坂、これ防災フェスタというのが 19、20 ページにありますので、これをざっとどんなことやったのということをご紹介させていただきます。

　左側の方でございますけども、たぶんどこの自治会でもそうでしょうけれども、防災訓練はおやりになってると思います。それから、防災を詳しく知るために大学の先生を呼んで別途講演会をやったり、これはやってると思います。災害は地震が起きてから復興まで一人の人間の流れがあります。その流れの中の訓練をやることもちょっといいのかなということでこの防災フェスタというのを思いつきました。

ここに書いてあるんですけれども、実際はそういう中でいきますとね、今まで皆さん起震車に乗ったことがありますとか、煙体験あります、消火器やったことありますというふうにあると思うんですが、この発想は、地震が起きて、あなたが地震が今起きました、さあ、家にもういられません。どうしますか。そうですね、どっかの一時避難場所とか逃げて、それから地域の小中学校に行く、こういうことを教わっていると思います。訓練もおやりになっていると思います。その流れを自分で体験するということをですね、やってみたらどうかということで、起震車も必ず乗ってもらう。さあ、家にいられなくなった、一生懸命逃げた。途中で火事が出てきた。煙のあるところから逃げていかなくちゃいけない。それをどうするんだ。その体験もやりました。それから、もちろん助けてくれ、家がつぶれて助けてくれと言った時に、助けないわけにいきません。だから、そういうこともあるんだよということもそこでやる。そして、何とか避難所に行きましたら、今度はみんなで助け合うんだよという、そういう流れのこの訓練でございます。１ページ目はそういう概要が書いてございます。

それから、もっと面白かったのは、訓練の中に大学の先生がですね、防災の話をしてくれたんですよ。一生懸命色んなパネルを作ってですね、見てですね、こういうことが起きるのか、こういうことが起きるのかという中で、今度は耳からの問題としてそれを聞いてもらったんでパネルをやる。パネルを見て大学の先生のお話も聞ける訓練なんですかというところから、今まで私どもの方では運動会などをやってたんですけども、なかなか人が集まらなくなってできなくなってきたので、防災という絡みの中で訓練じゃだめだったんです。

防災フェスタ、何だそれはというところから、地域の町会長さん、皆さんに説得を始めてやった。できるかなというような思いがありましたけれども、なんとかやったのが右側のページを見ていただくとわかるんですけれども、災害を自分事として捉えてくれるのがこのミソなんですよね。どういうこと。本当に皆さん最初そうでした。でもここに、それまでの私も地域の活動で一生懸命やっていた時にいるんだ、人はいっぱいいるんだ。だけど何となく縦割りで動いてるから、横につなげるとね、とても面白いことができるんじゃないかという発想で、各町会長さんが、今日隣にいます、松本さんも含めましてね、説明をして、何か面白そうだからやってみよう、面白そうだから。そして先ほどの第一部のところでもお話がありましたけれども、大学の先生たちからもお話がありましたけれども、今、非常に地域の方たちが防災だとどうも飛びつくそうだ、本当に飛びついてくれました。それで、こんな形で内容を見ると、消火訓練、何だ、消火訓練なんて大したことないじゃないかとかいうところがあるんですけれども、防災訓練を始めました。

それでは、概要の訓練の中で、パワーポイントの話、ちょっと裏方裏の話をさせていただきます。はい、お願いします。１枚めくってください。はい、これは単にみんなで準備してんじゃないか。今まで防災訓練というのは行政側がやります。総合防災訓練、地域防災訓練をやります。現場に行きました。もう全部準備されている。そこで見ていただけだと思う。これ見てください。町の人が自分たちで飾ってるんです。この準備も自分たちでしている。

これ２年目の話なんですけどね、まさしく力があったんですよ。そこにうまく私一人で一生懸命企画してやってた。一人じゃできるわけないだろう。そうなんですよ。だから手伝うんだよというところで生まれて、計画をしっかりしてやっていたら、地域の人たちが自分たちで貼る、これ貼るだけじゃないんですよ。貼ると見るんですよ。事前に説明もします。また、こういうことを準備することによって、自分が自分ごととしてこの資料を見ることができます。

そして、同じ体育館の半分、幼稚園の４分の１ですけどね。大学の先生に申し訳ない。こっちの方でいっぱいわあわあやってるけど、防災の話をしてください。ちょっと左の方にパネルが見えてますけどね。これ皆さん、実は東京都が東京防災、東京防災まちづくりという冊子を全戸に配ったと思います。全部皆さん読みましたか。なかなか読めないですよね。それを大きくパネルにして、必要な部分だけをまた目で見てもらう。それを東京都にご協力いただいてやったんで、ちょっとこれはお金がかかったんです。

そして、災害が起きたら、もう本当にテレビを見てもそうですけれども皆さん苦労してますよね。それから、災害は何とかその時点では生き延びたけれども、次の段階として亡くなる方が多い。その時に、実はボランティアというものとか、それから高齢者については地域の高齢者支援センター、今日センター長も来てますけれどもね、そういう方たちがね、災害弱者と言われてる、今は要支援者と言われてますけど、その人たちとつながりを持って助けてくれる制度ができてるんで、そういうものがあるんですよということを訓練の中で実際にこれも見てもらったんです。ですから、こういうところ大切なんですよという、今までにない訓練。

そして、これは自分たちでやってみる。同じように行政側は、もしくは小学校、中学校がこういうテントを作って見てください、避難所ってこうですよってやってたと思うんです。これもみんなが作って避難所を開設する担当の自治会の人が来て、勉強をして、説明までやってくれたんです。気がつかないかもしれませんけども、皆さん椅子に座って見てくれてるんですよ。多分皆さん座って防災訓練、これ見たことないと思うんですよ。行政側がすると、はい、これです、これですと、みんな立ってこう見てましたよね。だけど自治会の人たちがやると、うちは高齢者がいるんだよ。だから、やはり椅子があった方がいいんだよ。それで熱心に説明する。聞く方も熱心なんです。これが底力が出てきた時の訓練の違う訓練の方法になってる。

そして、これもそうですね、右側の方を見てください。多分、消防団、消防署の方、消防団の方がこうやって助けるんだよって見たことあると思うんです。これも町の人たちがね、説明を受けたら、ああ、私もやってみるわ、やっぱりやらなきゃだめだ、やらせてください。まさしく町の人たちが自分で場を作ってくれたけれども、行政側が作ってくれたけども、自分たちでね、やってみると、これは重くて大変だ。そういう訓練でした。

そしてこれは子供から地域がやりましたので、小さな子供からお年寄りまでみんな一緒にやってます。ちょっと左の方を見るとトイレがありますよね。多分、今も非常に災害時のトイレにつきましてね、色んなお話がありますけれども、これ実は減災ラボというところなんですけれども、ただトイレ見せたんじゃないんです。オレンジ色の色が見えてますけれどもね。実際にトイレを使って、袋をやって、それでそこに入れて、こうやって閉めて、ここまで捨てるというところまでの訓練がこういうふうに見えたと。同じように、右の方も、こういったものもですね、防災訓練、炊き出しがありますからね、炊き出し準備しましたから、食べてみてくださいではないんです。ガスコンロから全部ですね。自分たちで持ち寄ったのでやってみる。それから一番すごかったのは、東京都の水道局の方では、水を配給する給水車が出ますよね。それで皆さんもらいますよね。それを実際にどんなに大変かということで、背中に背負う水のタンクがあるんです。それに水をいっぱい入れて、体育館の舞台があるんです。舞台に登るには階段が必要なので、背負って階段を３段ぐらい登ってみたらどのぐらい大変なのか。水をもらうだけじゃなくて大変なことがあるんですよ。こういうこともこの訓練でできた。

というわけで、今までにない形で企画をしてみた。そしたら力のある人がいっぱいいた。それが防災という、先ほどからもお話がありましたけれども、皆さんが本当に危機に感じている、それを取り上げてみたら、その力のある人が芽を出してくれた、そういう訓練でございました。以上でございます。

【小山さん】
はい、ありがとうございます。まず、先ほどの一部の方でも、防災っていうのは皆さん興味がある内容ということで、防災の取り組みを通して地域の方々が皆さんで協力しているというお話でした。

今２つのですね、ちょうど本当に第一部の方でも子供たちとか若い人たちっていうキーワードを出てきましたし、防災っていうことが出てきて、二つすごく何て言うんでしょう、何かやったら真似できそうなんだけど、なかなかやれてないっていうですね。素晴らしい事例だなと。なんて表現していいのかな。なかなかできないことなんですよね。それをやっぱりやってらっしゃるっていうのが本当に素晴らしいと思います。

ここからはですね、こちらのパネルでお二人いらっしゃっていただいてますので、それぞれのお立場から少し自己紹介も含めてですね、今の事例に対してコメントなり質問なりいただければと思います。それでは、津賀さんの方からお願いします。

【津賀さん】

はい。ダイナックスの津賀と申します。普段ですね、東京都つながり創生財団や都内の自治体さんと一緒に、町会・自治会の色んな活動の支援、あと、先ほどもご紹介があったような防災活動をどのようにやったらいいのかということで相談を受けて、一緒に企画をしたり、運営のお手伝いとか、そういうことをさせてもらってます。

僕も色々色んな地域関わらせてもらってますけれども、本当に二つの団体さんとも非常に創意工夫のある、楽しそうだなと行ってみたいなっていうふうな、そういう取り組みをされているなっていうふうなのがまず第一印象です。

そして、ポイントだなと思うのは、二つの団体さんとも色んな団体さんと一緒にやってるっていうところが良くて、やっぱり町会・自治会さんですね、何かやろうって言っても、やっぱりなかなか大変な部分もあったりするんではないかなと。もしくはアンケートにもあったように負担感を感じるから、ちょっと続けるの大変だなって思うことなんかもあるんじゃないかと思うんです。何かそんなところがですね、二つの団体さんとも、自分たちの自治会とは別に協力を求めて一緒にやりましょうっていうふうにやったところがポイントだったように思っています。

ぜひ、ちょっとそのつながりの部分をですね、お聞きしたいなと思うんですけれども、今回色んな高校生であったりとか、もしくはですね、大学生とか先生、あと社協さんとか、色んな立場の方にお声がけをしてるわけなんですけれども、そのアイデア自体がどうやって出てきたのかっていうことと、やっぱり一緒にやった団体さんがどのように感じたのかってい

うふうな部分、もしくは一緒にやってですね、それぞれの町会・自治会さんでよかったなって思うところ、その辺をそれぞれの団体さんからお聞きできたらいいかなと思うんですけども、いかがでしょうか。

【馬込三本松町会】
今回、高校生ボランティアの方に参加いただいたきっかけは、先ほど説明はさせていただいたんですけども、うちの役員としてはもともと高齢者の 70、80 歳の方が高校生と触れ合う機会ってほとんどないんですよね。今回、高校生ボランティアに来ていただいたことで、役員の心変わりといいますか、今の高校生ってテレビが見たりとか聞いたり話じゃなくて、実際に会って話してるとすごい大人的な考えを持ってて、すごいいい取り組みをする子たちが多い。すごくいい印象を持って今回行事に取り組むことができました。

高校生たちにも、ただ単純にイベントだけしてもらってしまうのはちょっともったいないと思ったので、アンケートのほうをとらせていただきました。内容としては、今後こういう活動をする場合、あなたたちだったらどういう取り組みでやっていきますかですとか、あとはどういったお手伝いだったらできますかっていうのをとりましたところ、今回のボランティアがですね、80 名ぐらい来ていただいたんですけども、９割ぐらいの学生の方がアンケートに答えてくださいまして、それぞれ自分のアイデアを全部紙にしたためてくれてまして、今後、例えば会館で映画鑑賞みたいなことをしてもとか、あと昔遊びとかが、最近の子は結構デジタルでタブレットとかがメインで遊ぶんでしょうっていうイメージあると思うんですけども、結構昔遊びのベーゴマとかやってみるとすごい熱中してて、あとトランプとかも置いてあったんですけども、それだけですごい時間をつぶせたりですとか、ちょっとやってみると全然違うところもあったりして、そういった何かもともとあったイメージと全然違うところで動いていたっていうと、僕はすごい取組としてはよかったなというふうに感じております。

【高瀬住宅自治会】
高瀬住宅自治会の方でも、実は私、地区の町会連合会、どこでもあると思いますよね。町田市でも 10 カ所あります。その町会連合会の会長の時に役員で入って、その後ですね、藤林さん、ちょっと面白いから相談役やってよというんで、相談役という仕事をしております。それから、その他に横串を入れるという意味では、町会や、それから青少年育成会、それから民生委員の方たち、学校の PTA さんなんかの入った地区協議会という組織も 23 区の中にもあるのかと思います。そこの地区協議会の方では事務局長をやらせていただいてます。

だからと思うとかもしれませんけれども、私は横の連絡網が結構私の中のアンテナの中にはあるんです。実はわからないよ、これがわからないよというようなお声を聞いた時、それは消防に聞けばいいとか、そういう人間が必ず地域にいるんですよ。それを探し出す。今回も、今日ちょっと高齢者支援センターのセンター長が来てますけどね。やっぱり地域のつな

がりをね、何とかしなくちゃ。高齢者の支援センターの方たちが街を歩いていて、高齢者から出てきた声、これもそのまんま支援センターだけではできない。藤林さん、こういうことが、やっぱり防災のことを非常に悩んでいるんだよとか、そういう声が入ってくる。そういう人間を探して、まずその人間に企画を、私企画させたんですけども、やるということでいくとわからないという声を皆さん聞くことはすぐできると思うんです。

次に大事なのは、わからないということを解決するために、どこに結びつけたらわからないまま、それぞれの地域に聞けばいいんです。私はたまたま役所におりましたけども、警察、消防、学校、それぞれのところにこういう動きがあるんだけど、こういうふうにやるとできるのか、どうやればできるのとか、学校を使わせてくれるのとか、そういう動きをね、させていただきました。

したがって、町会長さんというのはそれぞれね、自治会長もそうですけど、役所の中から福祉からのご連絡が来たり、色んなところから来て、窓口はわかってるのかな。だから、その窓口はわかってんだから、その窓口につなげられるように助けてくれという声を届ける。こういう声があったから、町会長の皆さんと話すとうまくいくと。

それで一番うまくいったのは、私、この東京都の支援、助成の支援を知らなかった。お金かかるから、町会のお金あるんだから出してよと言ったら、藤林さん、何言ってんだ、東京都にこういう支援事業があるんだから、それ使えばいいんだよ、ああ、そうなの。これもそういう声を聞いたと。だからアンテナを張るということ。それさえすれば、何も努力しなくても大丈夫だと思います。

【津賀さん】
はい、ありがとうございます。まさに馬込さんの方はですね、単にお願いするだけじゃなくて、そこからどうでしたかってアンケートを聞いたりとかして、フィードバックをもらう。さらにそれをつなげていくという、この循環がすごくいいなって思ったところと、あとはその高瀬住宅自治会さんの方は色んな人のつなぎ役になる。町会・自治会さんだから知っている色んなつながりを生かして一緒にやろうよって。そうやってできるところっていうのが、やっぱりその強みなのかなと思って聞いてました。ありがとうございます。

【小山さん】
はい、ありがとうございます。それでは続いて中山さんの方からお願いします。

【中山さん】

中山エミリと申します。今日はもうそうそうたる先生方のお話や、現場で色々なことに心を注がれてきた皆様のお話の中で、ちょっと私なんかがここの場所にお邪魔させていただいて大変恐縮なんですが、私も子育てをしながら、今、東京都で生活をしておりまして、残念ながらですね、先ほど一部のお話でも少しありましたけれども、私、マンション住まいなもので、今まだ町会さんというものとの接点がない状態なんですね。

で、こうして色々お話を聞かせていただくと、まさに子育てをしていたり、防災に関しては日ごろ無いに越したことはないですけど、いつ来るかわからないものに備えるっていう準備って、すごく一人ぼっちだと、心細かったりすることが多いと思うんですけれども、そういうものの背中を押してくれる存在が自分の町にいてくれるんだっていう心の安心感っていうのはとても大きいと思いますし、また子育てをしている中でも、やっぱり自分が育ったときよりも世の中の環境ってとても変わっていると思うんですけど、地域にこういうお姉さんが住んでいるんだよなとか、こういうおじさまここにいたよな、あの時会った方だって思えるような方の目が周りにたくさん、一人でもたくさんいてくださることっていうのは、すごく子供にとっても安心な世の中につながるんじゃないかなと思いますので、皆様が一生懸命やってくださってることって、本当に一人一人の生活と直結していることなんだなって改めて感じております。

【小山さん】

ありがとうございます。私の方からもですね、今お話をお聞きしながら少し考えたことが、一つは、会長さんというお話もあったんですけれども、今まで一部も含めてですね、地域の

中に例えば子どもや若者だったり、大学だったり、高校だったり、様々な他の団体さんもあって、色んな資源ありますよねっていう話があったんですけど、一番はやっぱり町会・自治会さんってすごい資源なんだなっていうことですよね。先ほどのネットワークのハブになるというかですね、普段から色々な民生委員さんだったり、青少年育成だったり、色んなところとお付き合いがあるわけですよね。それが大変ってこともあるんですけれども、そんなことをしている人は他にはいないわけですよね。なので本来だったら先ほどの中山さんからあったように、お子さんを育てていらっしゃる方って、やっぱり最初はどこに何を聞きにいったらいいかっていうこと。私も最初子育てでですね、何か地域の方に名前をもらわなきゃいけないって小学校に言われて、初めて民生委員さんのところを訪ねたりってこともあったんですね。

そんなふうにして、どこに聞けばいいかわからないっていうところの、まさにその資源を丸々持っているのが町会・自治会さんなんだっていうことを改めて胸を張るべきだっていうことだと思うんですね。なんとなくやっぱりちょっとこう、加入率も下がったり高齢化していったりして、何か後ろ向きなことばかりに目がいってしまうんですけれども、やっぱりもともと持っている力みたいなものを自己評価っていうんですかね、それをもっと発信していけるっていうことが非常に重要なのかなってお聞きしました。

私からもですね、質問をさせていただければと思うんですけれども。新しい仲間、例えば高校生もそうですし、防災フェスタの方も、先ほど写真で見せていただいたものっていうのは、新しく色々取り組んでらっしゃるわけですよね。これまでは町田市さんがお膳立てしてくれたところに、地域の方々が色々やると、そんな風にやっぱり言うは易しじゃないんですけれども、ちょっと先ほど私がですね、結構やろうと思えばできるかもしれないのに、なかなかできないことなんですよね。どこも簡単にはできない。そこを一歩踏み出した結果というかですね、こんなことがやっぱりちょっと課題としてあったよとか、先程来思ってもみないこと、いいこともあったってお話もあったんですけれども、改めてやってみたら、実はこんなふうにできたとかですね、なんか何かやると案外簡単だよとかですね、何かそのあたり、やってみたらこうだったっていうお話を二自治会から教えていただければと思います。
まずは馬込の方からお願いします。

【馬込三本松町会】
町会は資源というようなお話もいただきましたけど、まさにその通りだと思います。私自身の人脈とかっていうものは、結局、その町会と関わり始めたきっかけっていうのは、まずPTAなんですね。こちらの金本副会長も今現在PTAの会長をやってます。

やっぱりそのPTAっていうのは、そもそもがボランティアで、大抵の人がこう関わる子どもを持っているご家庭です。なのでそのボランティアの入り口として非常に広いわけですね。その中で知り合った人たちであったりとか、そこでその地域が、うちの大田区というのは特

に地域力っていうのはすごく高いというか、何て言うんでしょうね、そういうものを目指している区なので、また区も出張所さんとか色々協力してくださると。馬込 19 町会あるんですけれども、その 19 町会の中で色々人脈もまず広がりますし、今それが大森地域、大田区全体というところまで広がっているというところで、人脈が資源だなというふうには思います。

簡単にできそうでできないというようなことなんですけど、それはまず何が大変だったかというと、あんなこと、そんなことをして子供たちの面倒を見るの大変だって、まずはそういうふうに町会の役員さんたち思っちゃったりとかするんですけれども、その辺の考え方ですよね。町会会館と町会会館の神社ですから、境内といったところをとりあえず外、公園の一部で、公園の一部として公園の中で誰か監視員がいて、自分で何て言うんでしょう、この一人で遊べないとかっていうことじゃないじゃないですか。自分一人で自由に遊ぶというところで、そういう考えでいいんですよと。役員さんは当然一人、二人留守番でいるだけでいいですからという形でやっていただいたというところですよね。怪我がないようにとか、色々ありますけども、あとはやってみたらやっぱり簡単にできちゃういうことです。町会会館をお持ちのところだったらどこでもできると思います。はい、そんな感じでよろしいでしょうか。

【小山さん】

ありがとうございます。まさに聞きたかったところで、やってみたらできちゃうという、ただ、なかなかやっぱり中を説得するっていうのは、やっぱり皆さんそうだろうなって思ってらっしゃるところだと思いますので、やってみたらできるっていう後押しでありがたいと思います。では高瀬住宅自治会お願いします。

【晴見台自治会】
私松本からじゃあちょっとお話をさせていただきます。この高ヶ坂防災フェスタっていうのは、9町内会の連合体の中でやりまして、そんだけ町内会でやるとですね、人材はかなり豊富なんですよ。例えば私の町会では、副会長をやっていた人が消防団の団長をやってたりとか、そういう人たちが結構他の町会にも色んな形でいらっしゃいます。

それから、先ほど藤林の方から説明がありました中で、町内会の連合体と町田市と組んで地区協議会というのを結成してるんですが、それには先ほど藤林が申し上げましたように、PTAだとか、福祉協議会だとか、色んな団体が入ってます。そういう中で、色んな人的つながりというのはどんどん広がっていきました。

それから学校関係ですね。先ほどの先生方のお話の中でも出たように、若い人たちの参加ってものすごく重要なことなんですよね。それで、小学校の子供さんたちまでは色んなイベントに参加してくるんですけど、中学生になった途端に知らん顔になるんですよね。そのまま就職して地方へ行っちゃったりするともう、子供の頃の自分の故郷に対する愛情というのがだんだん薄れていってしまう。

その辺が今の地区の衰退の一つの原因にもなってるんじゃないかとは思うんですが、そういう中で、先ほどちょっと言いました地区協議会で、別のイベントで成瀬センターまつりっていうのをやったんですが、その時に中学生の子供たち20人ぐらいでしたかね、ボランティアで参加してくれて、それは学校の先生方が学生のためにものすごくいい経験になるんで、ぜひやらしてくれと。もちろん最初はこちらから声をかけたんですが、すごくノッてきて、それで中で色んな売り子の役をやってくれたり、それから最後に少し売るもんが余ってきたら自分たちで段ボールで箱を首から下げて、そこへその余った商品を入れて売り歩いてくれて、結局完売したりね。それが最初の年度でやりました。で、次の年度でまたやったら中学生たちがまたやります、ぜひやりますということで、今度は中学生の方からやらしてくれと、これはすごくいい成功体験だったなと思っております。

【小山さん】
ありがとうございます。やっぱり一歩始めてみると、案外こうスムーズにというかね、進むっていうお話だったかなと思います。

それでは少し時間も迫ってまいりましたので、こちらのコメンテーターのお二人からですね、今後に向けて、町会・自治会さんへの期待も含めまして、こういったところに進んでいくとか、進んでいってくれたらいいなとか、自分もこうしたいですとかっていうことありましたら、お話しいただければと思います。では津賀さんからお願いします。

【津賀さん】
はい、ありがとうございます。先ほどのアンケートの結果でも、やっぱり地域の防災の取り組み、非常に関心が高いというのがわかったところだと思います。今日の話の中でもですね、本当に充実の取り組みというのがされていて、やっぱりこういうのが広がっていくのがいいなというふうに思っているところあります。

ただ、やっぱりどうしても防災というと訓練をしないといけないとか、そういうふうに思われている方もいらっしゃるんではないかと思います。ひとつ、やっぱり色んな町会の活動を見ていて思うのはですね、今日のように色んな人たちが一緒になってイベントをする準備をして、当日の運営をして片付けまでやるって、この一連の流れってみんなが力を合わせるっていうところで、災害時にすごく役立つことだと思ってます。なので防災訓練ももちろん大事なんですけれども、やっぱり地域でイベントをする時に、色んな団体さんと一緒に準備をして、当日みんなで楽しんで片付けまでやって、また来年もやろうねって。このサイクル自体が災害時に活きてくるんじゃないかなっていうふうに思っていますので、ぜひそんな観点で地域の取り組み、今後もやっていただけるといいかなというふうに思います。以上です。

【中山さん】
改めて今日色々なお話を伺わせていただいて、本当に皆さんの活動っていうのはそれぞれの地域の財産なんだなっていうのを改めて感じましたし、子育てをしていると、家庭だけではなくて、そして学校任せではなくて、家庭と学校を両輪で子育てをしていきましょうなんていう話がよく出ますけれども、そこに地域の皆さん、地元の皆さんが加わっていただけてその中で成長していけることができる子供っていうのは、きっと同じ環境の中で育っても、心の豊かさであったり、色々な方の中で育てていただけると、とても幸せなことだろうなと

思うので、残念ながら今すぐ私はこの町会ですっていうところにはまだ入れていないですけれども、少しでも地域の皆さんとつながりを持って、これからも子供を育てていくことができたらなと思っております。

これはちょっと恥ずかしながらですね、私、機械が苦手で、デジタルな時代についていけていないんですけれども、やはり先ほどの一部のお話でも、色々なこういう活動もデジタル化がすごく大事だよってお話伺う中で、ああそうか、やっぱり災害とかそういうことが起こると、よりこうデジタルに進んでいくと、色んな方にきちんと情報って伝わるんだなって改めて思ったんですけども、若干デジタル苦手な者にしますとですね、地域にある伝言板、掲示板、そこからいただける情報って意外と大きくてですね、皆さんもそういう草の根的に一生懸命貼ってくださってたりしているものって、そうか、ここにはこういう歴史がある町だったんだなとか、長年そこで生まれ育ったわけでない私とかでも、色んなことが知ることができるツールになっているので、できれば伝言板の方もどうぞ、古より長々続いている大事な日本の伝言板も残していただけると今後は嬉しいなと思います。

今日はこうして皆さんのお話を聞ける貴重なお時間をいただきまして、ありがとうございました。

【小山さん】
ありがとうございました。それではですね、今お話もあったんですけれども、デジタル化ということもそうですし、今日の第二部でもですね、色んなところと一緒にやっぱり連携していったり、一歩踏み出してみるってことが何か変わるきっかけになるのかなっていうヒントだったかなと思うんですけども。

今、最後の中山さんのお話って非常に重要で、実は回覧板をデジタル化しようとしてる自治会の会長さんがおっしゃってたんですけれども、回覧板って重要なのよと。顔が見える関係で、今日この人具合悪そうだなとかですね、やっぱり何かあった時にすぐ気づくような関係。ただ、本当に回覧板を回すだけなんですけれども、それだってすごく重要なことなのよってデジタル化しながらおっしゃってたんですね。だからそういうことってやっぱり一方で、今掲示板が重要って、ぱっと見て、デジタルって見に行かないと見えないっていうところもありまして、やっぱりここにいつも貼ってあるみたいなことって非常に重要だと思うんですね。

そんなところで何か一方向に必ずしも行かなければいけないっていうことではなくて、改めて皆さん自身の活動の良さっていう部分も含めて、色々とご検討いただき今日の皆さんの事例なんかも含めてご検討いただければと思います。二自治会の方々、とてもいい事例紹介していただきましてありがとうございました。

閉会挨拶

東京都生活文化スポーツ局都民生活部長　柏原　弘幸

改めまして、本日ご参加の皆様、長時間に渡りましてどうもありがとうございました。本当に２時間があっという間に感じてしまうような盛りだくさんな中身だったと思います。

第一部のパネルディスカッションでは、パネリストの皆様から京都の例、それから横浜のタワーマンションの例、そして豊橋のデジタル化の例という非常に多様な例とご所見をご披露いただきまして、本当にありがとうございました。齊藤先生、それから小野先生、谷先生、どうもありがとうございました。

また、第二部では事例紹介、トークセッションということで、二つの町会から実際に活動をご紹介いただき、そしてパネリストの皆さんから大変重要なご指摘やご意見等を頂戴いたしました。馬込三本松町会の皆様、高瀬住宅自治会の皆様、そしてパネリストの津賀様、中山様、どうもありがとうございました。そして、本日ずっと通しでファシリテーターをやっていただきました小山先生、本当にどうもありがとうございました。

東京都といたしましては、引き続きですね、町会・自治会の皆さんのイベントや活動等をお支えする助成、そしてマンションと町会・自治会との合同訓練等を通じましてですね、町会・自治会の皆様の活動をしっかりと支えることを取り組んでいきたいと思っております。

本日のフォーラムが皆様にとって地域活動を自分ごとと考えていただくきっかけ、そして町会・自治会の皆さんの活動等のヒントとなりましたら大変幸いでございます。本日はどうもありがとうございました。

アンケートで寄せられた感想など

1　町会・自治会活動への意気込み

回答内容
良いお話を聞けました。自分の町会でも頑張りたいと思います。ありがとうございました。
とても充実した時間でした。ありがとうございました。町会活動に関わっていけたらと強く思いました。

2　町会・自治会活動のヒントや気付き

回答内容
やれることにいろいろ気づかされました。このような会に参加してみて非常によかったです
現在集めている事の方向性とも合った内容でとても参考になりました。ありがとうございました。
現状、実態、手法、成果、課題、いろいろ見えて参考になりました。ありがとうございました。
新しい考え方や視点が参考になりました。
非常に参考になりました。谷先生、小野先生の話が良かったです。
加入を重視せず、活動を重視という谷氏の考えに新たなヒントを感じた。
今後に非常に勉強になりました。
企画、計画、実行、そこに人のつながりを感じました。
PTA と並んで組織運営に苦慮している自治会の課題と可能性の一端を知ることが出来た。

3　町会・自治会活動のデジタル化

回答内容
考えの作り直し、見直しが必要で、つい今のままが良く思ってしまっているところからの考えを直せたらと思う。寄りそうもありだが、デジタルにも取り組もうと思った。
ヒントいただきました。LINE 回覧板と掲示板の 2 つで考えてみたいと思う。
デジタル化の必要性、もっと進めていきたい。そこにデジタル支援担当があると大変有難いことを思いました。
デジタル化が重点施策になっている中、従来の掲示板・回覧板も必要という話が心に残りました。ありがとうございました。

4　その他の感想

回答内容
活動のお話ありがとうございました。
難しかったけど面白かった

資料編
1 第一部の説明で用いた調査結果の資料

町会・自治会活動に関する調査

1 調査概要

東京都は町会・自治会の取組の現状や課題、都民の意識などを把握し、今後の加入促進等に資する取組等の検討につなげることを目的として、令和５年度調査を実施しました。

2 調査詳細

○都民調査	都内在住の２０代以上の５０００人にウェブのアンケートを実施
○町会・自治会調査	都内２０００団体に郵送・ウェブ併用アンケートを実施（回答数１４７０）
○区市町村調査	都内６２区市町村にメールでアンケートを実施

3 調査結果の概要

【都民調査】

・町会・自治会に加入しているとの回答が**41.4%**。 **年齢が上がるにつれて**加入の割合が高くなっている

・加入している人に聞いた現在の町会・自治会活動の問題点は、**「若者や仕事を持つ人が参加しにくい」33.0%**、**「当番などがあり、活動への負担感が大きい」28.8%**、**「活動内容が慣習化・マンネリ化している」20.9%**

【町会・自治会調査】

・会長の年代は、**「70代」が48.2%**、**「80代以上」が17.7%**。合わせて**約7割が70代以上**

・町会・自治会の運営上の課題は**「活動の担い手の不足・固定化」78.7%**、**「役員の高齢化が進んでいる」65.7%**、**「加入しない住民が増えている」51.9%** が上位

【区市町村調査】

・**町会・自治会数**や**加入率**について、５年前と比較して**減少傾向**がみられる

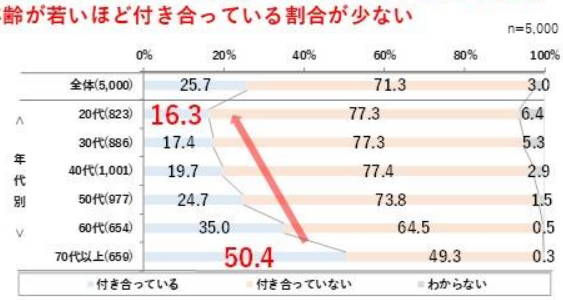
0

Ⅱ　調査結果　　【都民調査】

地域社会とのつながり

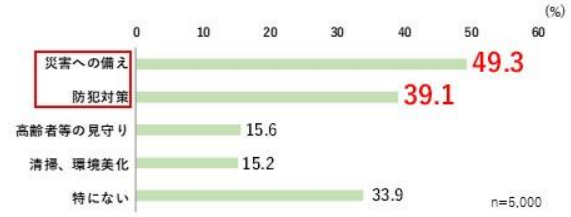
近隣住民との付き合いの程度

「付き合っている」25.7%、「付き合っていない」71.3%
年齢が若いほど付き合っている割合が少ない



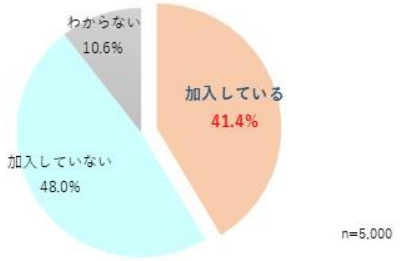
地域社会での暮らしについて不安に思うこと（上位5項目）

「災害への備え」49.3%、「防犯対策」39.1%



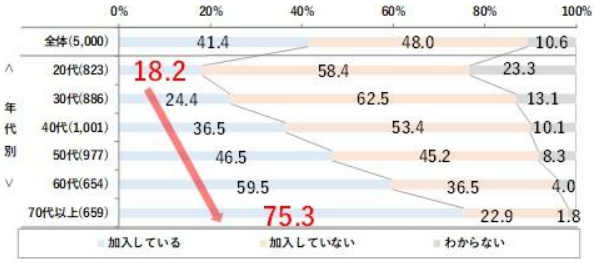
町会・自治会への加入

町会・自治会に加入しているとの回答が約４割



町会・自治会への加入（年代別）

年齢が上がるにつれて加入との回答率が高い

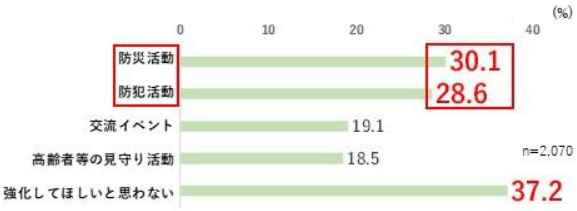


Ⅱ　調査結果　　【都民調査】

町会・自治会への加入

強化してほしい町会・自治会活動（上位５項目）

「防災活動」30.1%、「防犯活動」28.6%
一方で「強化してほしいと思わない」が37.2%



町会・自治会へ加入してよかったこと（上位５項目）

「行政や地域の情報を効率的に得ることができた」20.7%
「地域の知り合いが増えた」19.2%

現在の町会・自治会活動の問題点（上位５項目）

「若者や仕事を持つ人が参加しにくい」33.0%
「当番などがあり、活動への負担感が大きい」28.8%
「活動内容が慣例化・マンネリ化している」20.9%

加入者を増やすために有効だと思う取組（上位５項目）

「負担にならない範囲で活動に参加できる仕組み」32.9%
「無理なく続けるための活動内容の見直し」24.9%

2

Ⅱ　調査結果　　【町会・自治会調査】

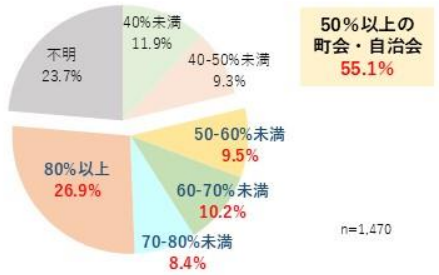
町会・自治会の現況

加入世帯数の分布

「100世帯未満」18.7%、「100-200世帯未満」15.9%、
「200-500世帯未満」24.8%、合わせて約６割が500世帯未満
世帯数の平均値は600.1世帯、中央値は337世帯

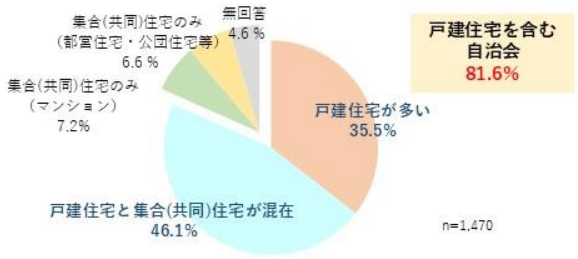
加入率

50%以上の町会・自治会が約５割



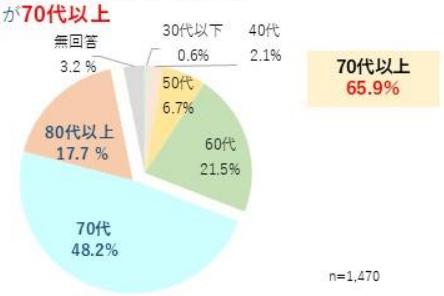
町会・自治会エリア内の住宅の構成

「戸建住宅が多い」35.5%、「戸建住宅と集合（共同）住宅が混在」46.1%
合わせて約８割が戸建住宅を含む構成



会長の年齢

「70代」48.2%、「80代以上」17.7%
合わせて約7割が70代以上

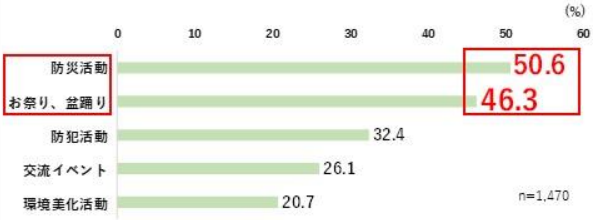


Ⅱ　調査結果　　【町会・自治会調査】

活動内容

特に力を入れている活動（上位5項目）

「防災活動」50.6%、「お祭り、盆踊り」46.3%



町会・自治会が抱える運営上の課題（上位5項目）

「活動の担い手の不足・固定化」78.7%
「役員の高齢化が進んでいる」65.7%
「加入しない住民が増えている」51.9%

運営上の課題の解決に向けて取り組んでいること（上位7項目）

「住民の興味・関心が高い防災に力を入れて取り組んでいる」50.8%
「若い世代や子育て世代に興味を持ってもらえるようなイベント等の企画」45.3%
「地域の他の組織や団体との連携・協力を進めている」36.1%

Ⅱ　調査結果　　【町会・自治会調査】

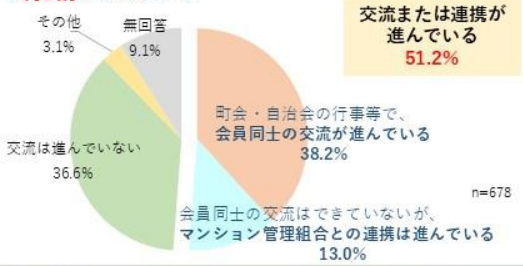
マンション住民と地元町会との交流・連携

マンション住民とのコミュニティ形成において期待すること

「町会活動への参加者や担い手の確保」76.0%
「防災訓練の共同実施による地域防災力の強化」51.2%

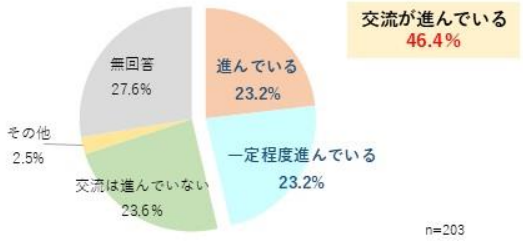
戸建住民と集合住宅住民の交流の有無（混在している町会）

「会員同士の交流が進んでいる」38.2%
「マンション管理組合との連携は進んでいる」13.0%
合わせて約5割となっている



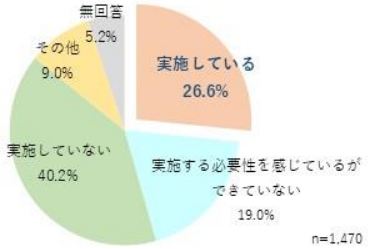
戸建住民と集合住宅住民の交流の有無（集合住宅自治会）

「進んでいる」23.2%、「一定程度進んでいる」23.2%
合わせて約5割となっている



防災訓練実施時における町会と集合住宅との連携

約1/4の町会・自治会で連携して実施している



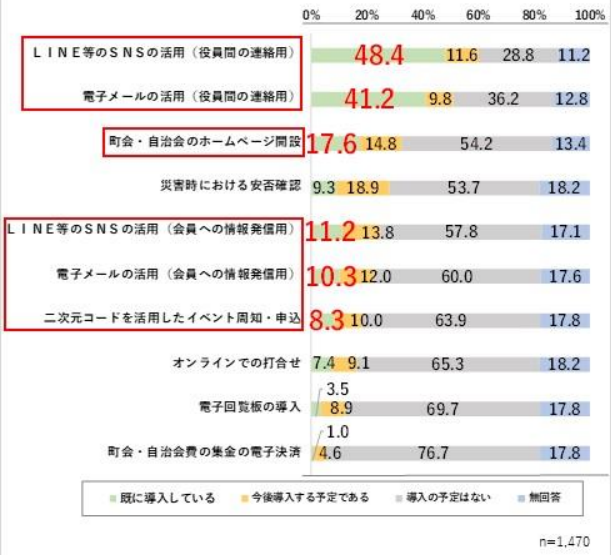
5

Ⅱ　調査結果　　【町会・自治会調査】

デジタル化の取組

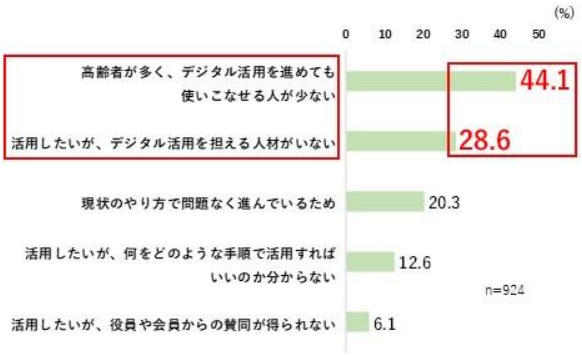
デジタル化の取組

役員間の連絡用では、ＬＩＮＥ等のＳＮＳは約半数が活用している一方、会員への情報発信のためのＬＩＮＥや二次元コード等の活用は1割程度にとどまっている
ホームページ開設は約2割



導入の予定がない場合の理由

「高齢者が多く、デジタル活用を進めても使いこなせる人が少ない」44.1%
「活用したいが、デジタル活用を担える人材がいない」28.6%



6

資料編
2 第二部で事例を紹介した町会の取組

防災

町田市

高瀬住宅自治会

事例集

事業名 高ヶ坂「防災フェスタ」

事業概要

●在宅避難をテーマに、近隣の自治会や地区町内会連合会と協力して「防災フェスタ」を実施。地震発生時の対応から避難生活、その後の生活再建までの一連の対策について、理解を深めてもらった。

●大学教授を招き、ミニ講座「迫り来る『首都直下地震』について知ろう！」を開催。大学生のボランティアも参加し、大学との連携につなげた。

実施期間　令和5年6月17日～12月17日
参加人数　参加者　約200名
事業総額　約40万1,000円
（地域の底力発展事業助成金　40万円）

役割分担
《企画・調整（1名）》自治体で防災対策の業務に従事した経験のある自治会員が企画書を作成し、関係機関等と意見調整。
《参加者募集・開催準備（約10名）》各町会長が参加者を募集。
《チラシ配布（約15名）》8町会で分担して配布。
《訓練の運営（約50名）》各町会の会長・副会長、防災部長、消防団が屋外訓練、体育館内での展示説明等を担当。学生ボランティア5名が会場案内などを担当。

事業の開始から終了までの主な流れ
令和5年
6月17日　町会長会議にて事業説明し実施を決定
10月22日　タイムスケジュール、役割分担を確認
11月18日　チラシ配布及び当日の役割分担最終確認
12月17日　防災フェスタ実施。終了後に反省会

主な経費（助成対象）
- 謝礼金　講演謝礼
- 物品購入費　パネル代、事務用品、インクカートリッジ、電池、衛生用品
- 印刷経費　チラシ、展示用パネル
- 役務費　イベント保険料、振込手数料、郵送料、代引手数料
- 委託料　避難生活体験コーナー設置・運営、パンフレット図案制作
- レンタル・リース料　打合せ用会議室使用料

高ヶ坂小学校体育館内のパネル展示の様子。警察署や消防署などからの説明に聞き入る参加者

事例集

事業の実施内容

在宅避難をテーマに高ヶ坂「防災フェスタ」を実施

災害を「自分ごと」として考えてもらうきっかけに

令和5年12月17日に開催した防災フェスタは、高ヶ坂小学校を会場に、校庭で災害体験、体育館では専門家による講座やパネル展示を実施した。

参加者はまず、起震車による地震体験、救護救出訓練、消火器訓練、屋外トイレの設置訓練などを通し、災害発生時における対応を体験。

続けて、体育館内では、実際に体育館に避難することを想定した避難訓練、在宅避難や避難所生活についての説明やパネル展示などを通し、災害時の対応や平時の備えについて学んだ。

さらに、工学院大学建築学部まちづくり学科の村上教授を招き、ミニ講座を開催。地域防災力を高めるためにできることについての説明を受け、災害に備えて、住民同士はもちろん、町会・自治会間でも連携を深める契機となった。大学生ボランティアは会場案内などを担当。地域住民と交流を深めた。

今回の防災フェスタを企画した自治会員の藤林さんは、「災害を自分ごととして捉え、日頃から備えて欲しい」と説明する。

上は消火体験の様子。左は自治会の協力依頼を受けて今回のフェスタに参加した一般社団法人減災ラボによる試食コーナー。避難生活での食事づくり、食材活用を実演してもらった

事業による成果・効果

地域で連帯感が深まり、防災意識の向上へ

「私たちの地区では、昔から各自治会が協力して運動会を開催してきました。しかし、住民が高齢化して子供たちが独立し、その開催が難しくなりました。一方で防災が地域にとってより大きな課題となっています。そこで、運動会を防災フェスタに変更しました」と藤林さんは経緯を語る。

防災フェスタが地域を結び付け、連帯感を深める新たな役割を担っている。参加者には、都や消防庁、警察署が発行する災害対策のリーフレットなどを配布。防災意識をさらに高めてもらった。「災害は待ってくれません。在宅避難をテーマとしたフェスタで、自助の大切さを伝えることができました」と藤林さんは話す。

事業を振り返って

声　遠慮せず行政に相談を

藤林さんは、自身が区役所に勤務して防災を担当した経験を踏まえ、「自治会で防災関連のイベントを考える時には、自治体に声をかけると協力してくれます」と語り、地域のコミュニティが行動を起こすことに期待を示す。「行政に遠慮なく相談すると良い」と説明する藤林さんは、防災フェスタを始めるに当たり、町田市に協力を要請。消防や警察が毎回、積極的に協力してくれている。「工学院大学の村上先生とは区役所で防災を担当していた時に出会いました。今回は先生が町田市で活動されていて、市を通して偶然つながりました」とのことだ。

防災フェスタを企画した自治会員の藤林さん

高齢者等の見守り活動

大田区

馬込三本松町会

事例集

事業名　こどもと高齢者の居場所づくり事業

事業概要

●夏休み期間に町会会館を開放し、高校生ボランティアによる子供たちの学習支援や高齢者との昔遊び等を実施。ボランティアの募集に当たっては近隣の2校に協力を依頼した。

●様々な世代の交流が行われるとともに、町会の取組への理解が深まった。

実施期間　令和6年5月8日～9月3日
参加人数　大人11名、子供約55名
ボランティア（高校生）約70名
事業総額　約10万2,300円
（地域の底力発展事業助成金　10万2,000円）

主な経費（助成対象）
● 物品購入費　水分補給用飲料、自由研究セット、消耗品（雑巾、紙コップ等）参加者配布用お菓子
● 印刷経費　チラシ、ポスター
● 役務費　傷害保険

役割分担
《企画（1名）》地元小学校でPTA会長を務める副会長が担当
《ボランティア募集（3名）》町会長らが高校に要請
《チラシ配布（約11名）》町会役員で分担して配布
《運営（約80名）》町会役員に高校生ボランティア約70名が協力
高校生ボランティア協力校
・東京都立大田桜台高等学校
・立正大学付属立正中学校・高等学校

事業の開始から終了までの主な流れ
令和6年
5月8日　初回打合せ。実施内容・方法を検討
7月1日　第2回打合せ。ボランティアに担当してもらう内容を確認
7月10日～8月31日　チラシ、掲示板等で事業を周知
8月19日～31日　会館を開放し、事業を実施
9月3日　反省会

事業の案内チラシ。会館を開放して、夏休みの宿題や自由研究、世間話まで子供から高齢者までが交流できることを案内

事業の実施内容

子供から高齢者まで参加 町会会館をコミュニティの拠点に

令和６年８月19日（月）から31日（土）までの13日間、「ほのぼのタイム　町会会館開放2024夏」と題して、町会会館を子供と高齢者が楽しく過ごせる場所として提供した。

運営には、町会の人たちに加え、地元の高校２校から生徒約70名がボランティアとして協力。ボランティアには、事前に組んだシフトにより、参加してもらった。

子供たちには、自由研究セットやお菓子を用意。約55名が参加し、夏休みの宿題をする子もいれば、トランプやベーゴマ、かくれんぼなどをして遊ぶ子たちもいて、ボランティアの高校生や町会の人たちも一体となり、各自が思い思いの時間を過ごして楽しんだ。

会館は神社の社務所を利用している。すぐ裏には交番があり、保護者も安心できる環境となっている。「見かけは昭和レトロですがWiFi環境もあり、子供たちはデジタルゲームでも遊べます。しかし、ベーゴマ等のアナログ遊びで問題はありませんでした」と町会長の菅田さんは話す。

ベーゴマ遊びの指導では、地元小学校のPTAとのつながりで、イベントサークル団体の協力を得た。

参加した高齢者からは「今の高校生は話題が豊富で、色々なことを知っていて関心した」という声が聞かれたほか、「また来てもいいですか」と尋ねるボランティアの高校生もいて、世代を超えて交流が広がった。

ベーゴマで遊ぶ子供たち。遊び方は、ベーゴマの魅力を伝えようと大田区で活動しているイベントサークル「東京ベーゴマ」が指導。ボランティアの高校生と高齢者も一緒になって楽しんだ

事業による成果・効果

夏休み中の子供や高齢者たちにとって貴重な居場所に

「共働き世帯が増え、子供が安全で安心して過ごせる環境が不足しています。そこで、高齢者の参加も含めて、会館の活用を考えました」と町会長の菅田さんは話す。「町会の人たちだけでは見守りが難しいので、近隣の高校２校に協力を求めたところ、約70名が参加してくれました。感謝とともに、この事業を通じて新しいつながりができたことを大変うれしく思います」と説明する。町会の公式LINEアカウントは、事業実施前は登録者が14名だったが、高校生も含めて49名に増えた。会館を安心して集える居場所としてさらに活用していきたいと菅田さんは考えている。

事業を振り返って

声

町会の活動を外に見えるようにしていく

「町会を支えてきた人たちが7、80代になり、若い世代が少ないことが町会の課題となっています」と町会長の菅田さん。「活動があまり表には見えないので、若い人たちは町会に入りにくい。子供の居場所づくりなどで会館を開放して、町会の姿を地域の人たちに見えるようにしていくことが大切だと思います」と説明する。副会長で地元小学校のPTA会長も務める金本さんは、「子育て中の忙しい世代にも加入してもらい、今は無理でも時間ができるようになってから活動に参加してもらえたら」と期待している。

町会長の菅田さん（左）は50代、副会長の金本さん（右）は40代。若い世代の参加に期待している

資料編
3　参加者募集時のチラシ

東京都

地域コミュニティ 活動推進フォーラム

いざという時に助け合える 地域コミュニティを目指して

プログラム

ファシリテーター　小山 弘美 氏

専門はコミュニティ論で、町内会・自治会やNPOと行政との協働が主な研究テーマ。
東京都「地域の底力発展事業助成」審査委員。

14:05～

第1部 パネルディスカッション

東京都が昨年5月に公表した調査結果を始め、各分野の有識者であるパネリストが
町会・自治会についての現状と課題を意見交換し、町会・自治会がいざという時に助け合える
地域コミュニティとしての役割をどのように発揮していくのかを議論します。

パネリスト　齊藤 広子 氏

筑波大学卒業。不動産会社勤務を経て、大阪市立大学大学院修了。英国ケンブリッジ大学研究員、明海大学不動産学部教授を経て、2015年より現職。国土交通省社会資本審議会住宅・宅地分科会会長等を務める。

パネリスト　小野 悠 氏

工学博士（東京大学）。アジアやアフリカで住民主体の都市計画・まちづくりを実践・研究。自治会のICT活用について、テクノロジーと共創する地域コミュニティの可能性を探究。日本学術会議若手アカデミー代表。

パネリスト　谷 亮治 氏

京都市まちづくりアドバイザー。
NPO法人勤務を経て2011年より現職。
博士（社会学）。
花園大学講師。

15:05～

第2部 事例紹介・トークセッション

夏休み期間中の子供たちの居場所づくりや、様々な団体と連携した防災イベントといった工夫を凝らした
取組事例について、企画・実施した町会・自治会の方にご紹介いただきます。
事例紹介後には、パネリストを交えて、今後の町会・自治会活動のアイデアなどを考えるトークセッションを行います。

パネリスト　津賀 高幸 氏

滋賀県立大学環境科学部卒業後、入社。
地域コミュニティ活動支援、被災者支援に関する業務に従事。
東京ボランティア・市民活動センター運営委員。

パネリスト　中山 エミリ 氏

1978年、神奈川県生まれ。1994年にデビュー以来、数多くのドラマ、映画、CMに出演。また、情報・バラエティー番組の司会としても活躍の場を広げる。2010年に結婚し15年に女児を出産。

16:00

申込方法

参加をご希望の方は、公式サイトの申込みフォームに
必要事項を入力し、お申し込みください。

URL

https://region.forum2024.metro.tokyo.lg.jp/

申込受付期間

2025年1月17日(金)14:00～2月7日(金)17:00まで

（お申込みは先着順となります。定員に達し次第終了となります。予めご了承ください。）

会場アクセス

- 「JR新宿駅」（西口から徒歩約10分）
- 都営地下鉄大江戸線「都庁駅前」A3出口から徒歩1分
- 新宿駅西口（地下バスのりば）から都営バス（都庁循環）「都庁第一本庁舎」下車

問合せ先

地域コミュニティ活動推進フォーラム事務局（株式会社ツクルス内）
TEL／03-6915-8003（平日10:00から17:00まで）
E-mail／region.forum2024@itto.co